
白馬の魔王様

あむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白馬の魔王様

【コード】

N0010M

【作者名】

あむ

【あらすじ】

28歳独身。いつか白馬の王子様が：なんて夢見るも、家と会社の往復だけの現実ではそんな出会いもなし。それが急に、異世界へ召喚！？そこで待っていたのは白馬の王子様 ではなく、魔族の王様。魔王様の后に選ばれながらも、元の世界に還りたいと願う彼女に、魔王様が提示した条件は、『魔王の子供を産む』or 『魔王を本気で惚れさせる』こと！？

第1話 いつか王子様が…

28歳OL、現在彼氏なし。

昨日、私の後から入った後輩が寿退社していった。

後輩に花束を渡し、笑顔で見送った私に、

「青山にはいい人はいないのか」

と田舎のお父さんのごとく聞いてくる部長に

「部長、それはセクハラです」

とそっけなく返す。

このやり取りも、これで何回目になるんだろう…。

入れ替わりの早いオフィスの中、気づけば私が女性社員の最年長。

お局様コースまっしぐらさ！

田舎のお母さんからも、毎度のように電話口で「結婚はまだなのか」「早く孫の顔が見たい」なんて言われるし。微妙なお年頃なんですよ。

いつか白馬に乗った王子様が…なんて少女趣味な夢物語を見る気もないけどさ。

でもさ、そんな運命的な出会いがないかなあって、ちょっとは期待したっていいじゃない？

だいたい、会社とアパートの往復をしてるだけの地味メガネが、どうやって結婚なんてできるのさ。

しかも口を開けば毒舌全開で、男性社員からも一線引かれちゃってるし。

婚活、なんて言葉も流行ってるけど……ねえ？

私まだ28だし。

……なんてのんきに構えてるけど、仲のよかった友人達もみんな嫁いでいってしまったもんなあ。
遊び仲間まで失ってはホント、出会いの場も激減なわけで……。
このまま一生独身??なんて未来を想像してどんよりしてしまう。

今日は、高校の仲良しグループで唯一残ってた独身組の結婚式。
結婚式が一番の出会いの場なんて聞いたことあるけど、残念ながら
全くの収穫なし。

手元にあるのはずっしり重たい引き出物のみ。
熱々な2人の愛をいっぱい詰め込んで、重たいったらありゃしない。

「あゝああ、私にも白馬の王子様現れないかなあ」
寒空の夜空にそうつぶやいた、と思う。

直後、くらりと世界が回った。

2次会まで出てはいたけど、そんなに飲んだつもりはないんだけど
…。

暗転した世界に光が戻った後、気づけばなにやら温かいモノの上に
座っていた。

あれ?もう家に帰ったっけ??

しかも何やら安定感が悪い……と見れば
あれ？何これ？？

違和感に視線を上げたそこにあったのは……

それはそれは端正な顔をしたイケメン様でした。

って、どういふことさ！？

第2話 魔族の王様

もしかしてもしかして、白馬の王子様？

なんて夢みたいなことを考えながら、

「ええっと、どちら様でございましょうか？」

イケメンの膝の上、という自らの居場所も省みずとりあえずの疑問を口にした私。

我ながら混乱してるなあ。

「白馬の王子でないことは確かな」

そう言って笑うイケメンの顔は確かに黒いニヤリな笑顔で、白馬の王子とはかけ離れてマス。

腹黒感満載な感じ。

くそう、ちよつとくらい夢見たっていいじゃないか。

「じゃあ、どちら様？」

なおも尋ねる私って、勇氣あるう。

「未来のだんな様。

それか、魔族の王様、といったところかな」

腹黒魔王！！

まさにそんな感じの外見です！！

……じゃなくて、だんな様に魔王様？？

どちらも今までの私の生活に全く関係のなかった言葉たち。

なんだかやばいところに来てしまったようだ、と遅まきながら思う。

「ええっと、とりあえず、家に帰りたいんですけど」

ともかく逃げよう！！

とか思っただけけど、現在進行形で私は自称魔族の王様なイケメンの膝の上に居た。

なので、極力丁寧に頼んだつもりだったんだけど……。

「却下だ。」

貴様は俺の妃になるのだから、ここに居ればいい」

ああ、何この人。

何様？俺様？

あ、魔王様か。

じゃなくて、なんでイケメンとはいえ初対面の男に命令されなきゃいけないのさ。

マジ意味わかんないし。

「ここがどこかもわかんないし、知らない人の妃になんてなる気全くないし。」

ともかく離して下さい！！」

プチ切れ気味に暴れてみたのにびくともしないし！！

「俺様を前にそれだけ拒絶できる女も珍しいな。」

妃の召喚なんてどうかと思っていたが、なかなか面白そうだ」

言いながら迫ってくる顔。

確かに、イケメンだけど！！

いい声してるけど！！

男としては見た目的にいい男だとは思うけども……！！

「私はそんな軽い女じゃないわ！！」

バチンとイケメンの頬を平手で殴ってやったさ。

ま、我ながらそんな言葉をホントに使う女が居るとは、と思いま

したとけれども。

あ、ちなみに、人を殴ったのは初めてですよ？
初対面でいきなりキスしてこようとしたんだから、正当防衛ですよ。

でも、実は小心者の私。

さっきも言ったとおり、人を殴るなんて初めてだから、勢いで殴ってしまったものの、その後どうしていいかわかりません。
とりあえず、相手の出方を待ってしまう。

「……いい度胸だ」

あわわ……。

なんかもう、地獄の底から響くような声が聞こえます。
まじ逃げたいのですが……。
私を捉える腕の力は緩まらず……どうしましょ？
覚悟を決めて、そっと、そっと上を見上げる。

そこには、真正正銘の魔王様がいらっしやいました。

第3話 魔族の王様？

私が叩いたイケメンの頬に、一筋の赤。

平手で叩いたんだけど、どうやら運悪く爪があたってしまったらしい。

やっぱり慣れない事はしないに限りますネ。

そんな魔王様の後ろに、何やら黒いモノが見える。

いや、マジで。

顔は笑ってるのに目が笑ってない。

私、マジで殺されるかも……。

「この俺様に傷を付けたとはな……」
傷に触れながらの魔王様のセリフは、なんとも言えない凄みがあ
る。

ホント、視線だけで殺せそう……。

なんて、人事のように考えてみるけど、その魔王様の視線の先に
居るのは誰あろう私自身で。

恐怖ってこういうことを言うんですネ。

締め日前の部長の剣幕とか、彼氏に振られたばかりの妹の負の才
ーラなんて非じゃないっす。

さて、この殺気から逃れるには、どうしたらいいんでしょうか???

どれだけそうしていたらろう？

たぶん一瞬のことだったんだらうけど。

魔王様の視線で金縛りのように動けない私の耳に、背後から声がした。

「我が魔王様に対して何たる無礼……」

「魔王様に傷をつけるなど……」

「あんな娘、殺してしまえ……」

一人のつぶやきに、大勢の言葉が連なった。

いきなりの背後からの言葉攻めにビビッてしまう。

怒号のような罵声の嵐に金縛りも解け、そつと背後を窺った。

そこに居たのは……

たくさんのイキモノ。

今まで見たことのないようなでっかい熊みたいなのとか、蛇みたいなのとか、毛むくじゃらなのとか……

たぶん、魔物、と呼ばれるモノたち。

どうやら玉座の周りに大勢の魔物たちが集まっているところだったらしい。

前には（というか膝の上に乗っちゃってるけど）魔王様、後ろは魔物の集団。

私、完全にヤバイ状況なのかも。

けど、なんかもう、限界……

そつ思いながら意識を手放した。

第4話 天蓋ベッドと引き出物

次に目覚めたのはベッドの上だった。

もしかしてさっきまでの全部夢？とか思ったけど、ふつかふかの寝心地に、夢じゃないなと思いつつ直す。

私が4〜5人寝ても支障なさそうなふかふかの広々ベッドは、現実世界ではそうそうお目にかかれない。しかもベッドの周囲を覆うレースを見るに、天蓋ベッドだと思われる。

なんていうか、異世界トリップのお約束的な？

ついさっきまで腹ペコ猛獣の群れの中バリのいつ死んでもおかしくないようなところに居たのに、この差はなんなんだろう？

出来れば始めからここに現れたかった…。

あれからどれくらいたってるんだろう？

あの場で死んでもおかしくない状況だったと思うんだけど、こないない場所に寝かせてもらってるということは、助かったということなのか？

いや、もしかして太らせてから食べられるとか!？

何にせよ、とりあえずは生き延びたい。

あとは何とかもとの場所に還る方法を見つけないと。

辺りの気配を窺いながら、そっと天蓋のレースをめくった。

そこは、だだっ広い部屋。どうやら誰もいないらしい。

またあんな魔物だらけのところに放り出されても嫌だけど、一人つてのもなんか不安になる。

ここはどこで、私はどうなるんだろう？

あの自称魔王様は、私を召喚したとか言ってた。

ついでにあの魔物の数々。

やっぱり夢みたいなお話だけど、異世界的なものに連れてこられたと考えるのが妥当かなあ。

やっぱりドッキリでしたって考えも捨てたくないけど。

未だふかふかベッドに座り込んだままいろいろ考えをめぐらしてみても、誰かが来る気配もない。

とりあえず、外に出るか。

そういえば、メガネはどこに行ったんだろう？

気を失うまでは確かに掛けていたはずなのに。

メガネがないと見えないほどではないけれど、ないとどうも落ち着かない。

長年愛用してきた相棒だし、どこかに保管されているといいんだけど。

天蓋の外は、さつき見たとおり広い部屋。

必要最低限の家具しか置かれてない、なんだか寂しげな部屋だ。

それにしても……

お腹すいた……。

我ながら情けない話だけれど、どんな状況だってお腹は空くんた。結婚式の2次会でも、ゲームだなんだとあまり食べれなかつたしさ。

何か食べ物とんでも何も無いし、誰も居ない。けれど、このままではお腹が空いて寝れそうもない。

あ、そういえば……

思い立ち、きよろきよろと見回せば、ベッドの側にひっそりとそれは置かれていた。

大きな紙袋のそれは、結婚式の引き出物。

重たい思いをして持ち歩いてたそれは、確か魔王の膝の上でも持ってたような気がする。

友人夫婦の愛がたつぷり詰まった引き出物。

がさがさと物色してみると……

「あつた」

カタログや食器とともに入っていたのはバームクーヘン。

何かお菓子系が入ってると思っただよねえ。

一人暮らしの身には大きすぎると思えるバームクーヘンも、今日ばかりはむしろ頼もしく見える。

ここでの私の待遇がわからない以上、食料でも何でも確保しておくに越したことはない。

そもそも、あんな魔物たちの食事が食べれるとも思えないし。

ま、とりあえずは今の空腹感を満たすのが優先。

我ながら、よくこの状況でこんなもの食べれるな、とは思っけど。

とりあえずは何か食べないと、お腹空いて何にも考えられないし。腹は減っては戦は出来ぬってね。私は今を生きるのです！

「あ、おいしい」

有名な菓子店のものらしいバームクーヘンは、甘さ・しつとり感共に絶妙でとてもおいしかった。

もし無事に元の世界に還れたらぜひとも買いに行こう、と心に誓うほどに。

そんなことを思いながらもとりあえず食う！

疲れきった心と体に、甘い食べ物に染み渡る幸せ。

どこに居たってそんな幸せを感じれる私ってステキ。

と、声が、した。

何とは聞き取れなかったけれど、どこか楽しそうな声。

「誰がいるの？」

と振り返ればそこには、さも面白そうに私を見る魔王様の姿がありました。

第4話 天蓋ベッドと引き出物（後書き）

お気に入り登録していただいている方々に感謝です！！

主人公、なかなか強いハート持ってます（笑）

まだ主人公の名前も出せてないですが、のんびり話は続きます。

第5話 魔法とお風呂？

バームクーヘン片手に振り返った先に、イケメン魔王様。
浅黒い肌に黒髪、加えて長身の彼は、くやしいがやっぱりイケメンだ。

回れ右して逃げてしまいたいけれど、ここがどこかのかもわからない以上、ここから動けない。

それにまだ、バームクーヘン半分以上残ってるし！

「気配は消してたつもりだが、よく気が付いたな」

なんだが褒められているような気もするけれど、そうでもないのか？

「なんか声がしたから。」

っていうか、いつからそこに居たわけ？

入るなら入るでノックぐらいしなさいよ！

起きたときは確かにこの部屋には私一人だったはずだ。

「ほお。 精霊の声が聞こえるのか？」

「精霊？ 何それ？」

そつえばさっきなんか声がした気がしたけど、精霊って…ホント物語でしか聞かない言葉だね。

っていうか、質問まるきり無視かよ！

「それより、とりあえず風呂でも入ったらどうだ？
ひどい格好をしているぞ？」

「な……!!」

確かに、着ている二次会ドレスはシワシワになってるし、ベッドに寝かされてたから髪の毛も乱れているだろう。メイクも崩れているだろうさ!!

けど、いきなり人の部屋に入ってきておいて、それはくない??
仮にも后にとか言ってた女に言うセリフだろうか?

「入るわよ!!」

けど、確かに風呂は入りたい。

自分に素直な私。

「そうか。」

では、あつちの扉だ」

ケンカ腰で答えたのに、彼の返事は至って普通。
なんか微妙に肩透かしを食らった気分。

別にケンカを売りたいわけではないんだけどさ。

「ではこちらへどうぞ」

魔王の合図で入ってきた女性（普通に人っぽく見える、しかも美人）に案内される。

「別に、お風呂くらい一人で入れるわよ?」

異世界トリップのお約束的に人に体を洗われるなんて絶対に落ち着かない。

対する魔王は相変わらずの意地の悪い笑顔。

「一人で入るのは勝手だが、使い方がわかるのか?」

「使い方って、何か違うの?」

「こちらの道具はたいてい魔力で動く。」

お前の世界では魔力などなかったのではないか？」

魔力…って、何ですか？？

ホント、知らない世界に来ちゃってるんだ…。

「…じゃあ、よろしくお願いします」

魔王に頭を下げるのはなんだか悔しくて、何も言わずに私たちのやり取りを見ていたメイドさん風の女性にお願いする。

「では、こちらへどうぞ」

ふわりと微笑まれてドキリとする。

全体的に黒い魔王とは対照的な白銀の髪と白い肌の女性はとても美人さんで、そんな風に微笑まれては同性の私でも惚れてしまいそうだ。

顔を赤らめる私を、またも面白そうに見ている魔王の視線を感じつつ、お風呂へ向かった。

第6話 魔法とお風呂？

扉を開けると脱衣所らしき部屋につながっていた。

窓のないくらい部屋で、先に入った女性が手を上げると、女性の手が一瞬淡いピンク色に光り、それに応じるように部屋の明かりがついた。

「センサー式なの？」

不思議に思っただけ天井を見ても、センサーどころか蛍光灯すらない。部屋全体が、光っているような感じだ。

「壁に魔力が込められていまして、そこに私の魔力に反応して光るようになっております」

彼女にそう言っただけ優雅に微笑まれても、さっぱり原理がわからない。

「改めまして、私、后様のお世話を仰せつかりましたコーラルと申します。」

どうぞ何なりとお申し付け下さいませ」

未だ明かりの原理を考えていた私に、彼女、コーラルの自己紹介。

「あ、こちらこそよろしくお願ひします…。」

…っていうか、后様とかやめてください。

私はあんな奴と結婚なんてする気全くないですから」

「そんなんですか？」

ですが、魔王様が皆の前でそう宣言されておりましたから」

全力で拒否してるのに、コーラルは全く信じてない感じだ。

「宣言って…無理やり急にこんな知らないところに連れてこられて、会ったばかりの人と結婚なんて考えられないです」

「じゃあ、これから魔王様のことを知っていったらOKということですね」

「は??」

笑顔でさらりとそんなことを言って、コーラルはささっと私のドレスを脱がしていく。

あまりの早業に、気が付けば私は一糸まとわぬ姿にされていた。

「后様、けっこういい体なさってるんですね。」

きつと魔王様もお喜びになられますわ」

うっとりな感じで人の裸見ながらそんな恐いこと言わないで頂きたい。

「あんな奴に喜ばれても全く嬉しくありませんし、喜ばすつもりもありません!!」

「そうですか？」

后様ってけっこう恥しがりやなんですな」

…コーラルって結構人の話聞かないタイプっぽい。

真剣に怒鳴って、お風呂に入る前から疲れた…。

お風呂は大理石風な石造りの大きなものだった。でも、お湯が入っていない。

しかも、蛇口すら見当たらない。
どうするんだろうと見ていたら、コーラルが湯船に手をかざした。
すると、明かりの時の様にコーラルの手が淡く光り、直後、湯船の
底からお湯が湧いて来た。
瞬く間に湯船にあふれんばかりのお湯が湧き出た。

「すごい…」

まさに、目が点な感じ。

「魔力ってすごいんですね…」

「あら、后様だってお使いになれますよ」

「え、私にはムリでしょ。」

「だって普通の一般人ですし」

確かに使えたら便利そうだし面白そうだけども。

「たぶん大丈夫ですよ。」

なにしろあの魔王様の后様として召喚されたお方ですから、魔王
様に匹敵する魔力をお持ちのはずです」

「いやいや、ムリだつて。」

「そんなの生まれて28年間使えたためしがないですから」

「そうですか？」

「そんなことないと思うんですけどねえ…」

なんだかすごく残念そうだけど、魔力なんてそんなの全くないから。

「あ、もしかして、魔力なんてないってわかったら元の世界に還し
てもらえるかも？」

「それはどうでしょう？」

魔力云々がなくても、魔王様に傷をつけることが出来るモノなんてこの何百年もなかったことですから」

希望の光が一瞬で消えた。

あんなの爪が当たっちゃっただけなのに…。

「ささ、魔王様がお待ちですし、早くキレイにいたしましょ」

気分を切り替えて嬉々と私を磨く気満々なコーラルさん。

なんだかその背中に悪魔の尻尾が見える気がする…。

そして、抵抗むなしくコーラルによって隅から隅まで磨き上げられたのでした。

第6話 魔法とお風呂？（後書き）

魔王様が出てこない・・・。

もうしばらくコーラルとのやり取りが続きます。

第7話 寝着と口付け

コーラルに隅から隅までピッカピカに磨き上げられて、ようやく浴室から出られた。

ホントもう、くたくた。

「さ、こちらをお召してください」

あんまりにも疲れていたので、差し出されたその服を確認もせず袖を通した。

さらりとした肌触りが、ほてった体に気持ちいい。

……が、ふと見下ろした自分の体に驚愕した。

「…あ、あの。」

この…服？ なんなの、これ？」

自分の身を覆うその布をつまみながらコーラルに尋ねる。

「思ったとおり、とてもよくお似合いでございますよ」

満面の笑みで答えるコーラル。

どこか誇らしげなのがまた癪にさわる。

「そうじゃなくて、なんなのこれ、スケスケじゃない！！こんなを着てる意味ないわよ！！」

そう、着せられたその衣装は、いわゆるネグリジェのようなものなだろうけど、それはもうものすごい薄い素材で出来ていた。

しかも、下着もつけさせてもらえていないため、体の線も大事な

ところもばつちり見える。
服とも言えない気がする。

「あら、では何も付けずに行かれますか？」

「そういう意味じゃないでしょ！！違う服を出しなさい！！」

「すぐくお似合いですのに……」

「いいから早く！！あと下着もね！！」

怒鳴り散らす私をよそに、まだ何かぶつぶつ言いながらコーラルは部屋を出て行った。

疲れた……。こんなに怒鳴ったの久しぶりかもしれない。

なのにぜんぜん自分の意思が伝わらないもどかしさと理不尽さ。

思い返しても、こっちに来てから誰も私の意見を聞いてくれてない気がする。

「はぁ……」

何度目かのため息をついたところで、コーラルが戻ってきた。

「あらあら、そんなにため息をつくと、幸せが逃げてしまいますよ？」

「もう幸せなんてこれっぽっちも残ってないから大丈夫」

「ふふふ。后様って面白いお方ですわね」

もう会話に疲れた。

とりあえず持つてきてもらった着替えを確認することにする。

透けてはいない。けど……

「露出が多すぎない？」

やたら布が少ない。

なんでこんなに胸元が開いてるんだ。

なんでこんなに丈が短いんだ!!

下着も、こんなの下着じゃないよ!ただの紐だよ…。

「もつとまともな服ないわけ?」

「まともとおっしゃいまして…」

「透けてないくて、長袖で、足が見えないような服。ないならもうさっきまで着てたドレスでいいから」

「もうあちらの服は洗濯係に渡してしまいましたから…」

「じゃあコーラルと同じ服でいいから。着替えとかあったら貸してよ」

コーラルは紺色のワンピース型の、いわゆるメイド服を着ている。身長がコーラルの方が20センチ以上は高いけど、持ってこられた服よりはだいぶました。

「そんな、このような服を后様に着せたとあつては魔王様になんとお叱りをつけるかわかりません」

「じゃあ違う服持ってきて」

「仕方ないですね…。けれど、どうせすぐ脱ぐんですから、そこまです気にしなくてもいいのではないですか?」

「ぬ…って、え???」

脱ぐつて何さ???

体キレイにして、セクシーな服着て…っつて、そういう流れだったの!?

「嫌よ!! 冗談じゃない!! 私は一人で寝るからね!!」

「え? どうしてですか? 今夜が初夜ですのに…」

初夜って…初夜って…なんかありえない展開になってるんだけど、
どういうこと？

后夜って…そういうこと？

「ひとつ聞きたいんだけど…。私、もしかしてもう、結婚したこ
とになってるの？」

死刑宣告を待つ気分で、ドキドキしながらコーラルの返事を待つ。
知らない間に結婚してましたとか、ありえない。

私にも選ぶ権利とか、心の準備とかいろいろ必要だ。

「正式には、まだですわ。

けれど、先ほども申し上げたとおり、皆の前で貴方様を后とすると
魔王様が宣言なさいました。

その際、宣言の口付けもなされたので、仮の婚姻は済まされた
こととなります。

ですから、正式な立后は儀式のあとになりますが、この城内での位
は魔王様に次ぐ上位になっております」

ちょっと、待って。

仮の婚姻に…口付け？

「私は…公衆の面前で、気を失ってる間にキスされたってこと？」

自然、声が低くなるのがわかる。

もういい大人なんだから、キスが始めてなんてことはないけれど、
でも、初対面の男に、しかも自分の意識のない状態でキスされた
なんて…。

「イケメンだったら何してもいいと思っただら大間違いよ!!」

瞬間、数年前に二股掛けられて別れた元彼を思い出した。

彼も結構なイケメンで、告白された時はかなり嬉しかったものだが、その分、最初から二股だったと知った時の怒りは半端なかった。以来、イケメンは信用できない。

そんな2重の怒りもあらわに、そのまま魔王のところへ殴りこみに行く勢いだったけれど、自分はまだ真っ裸だったと思い直して留まる。

「后様、落ち着いてください。」

あの場で魔王様があのようになさるなければ、広場に集まった魔族たちを落ち着けることはできなかったでしょう」

怒りの矛先を探していた私に、コーラルが落ち着いた声で語りかける。

「あの時、魔王様に傷をつけた后様を処分しようと魔族たちがいきり立っていました。」

「気を失った后様に口付け、『この娘を我が后とする』と魔王様が宣言しなければ、今頃后様はこうして生きては居られなかったでしょう」

落ち着いた声ながら、その言葉は私の心にしっかりと入ってきた。確かに、あの時、背後にいた魔族の大群からの負のオーラに負けて気絶してしまった。

ベッドで起きたとき、自分が生きていることを不思議に思ったほどだ。

だったら、キスぐらい……許せる？

いやいや、許せないでしょう。
気絶してる間に、そんな大切な口付けされたなんて。
しかも相手は魔王様だし！！

でも……

「……やっぱり許せないけど、まあ今のところは不問にしておいてあげるわ」

だいぶ上から目線発言だけど、今はまだこれ以上の気持ちの整理は出来ない。

「ああ、もうとりあえず疲れたから今日はこれでいいわ！」

今日のところは露出満点な寝着で我慢しておいてあげるわ。
もう何もかも忘れてこのまま寝てしまいたい。

コーラルに夜着を着るのを手伝われて、脱衣所を出る。
そして、ついさっきまで寝ていたふかふかベッドへ。

……はい。
魔王様の存在、忘れてました。

第7話 寝着と口付け（後書き）

今回ちょっと長めになりました。

主人公は熱しやすく冷めやすい、ひとつのことしか考えられないタイプ。

コーラルさんはなかなかよい性格してます。

さて、次話、ようやく魔王様登場。

第8話 魔王様は鼻呼吸（前書き）

我ながらなんだこのサブタイトル…
ノリと勢いで付けてますのでご容赦ください

第8話 魔王様は鼻呼吸

コーラルより先に部屋に戻って、さっさとベッドに入り込む。やっぱりふかふかだ。寝着の露出が多い分、肌にしかに布団が触れる。さらりとした肌触りの布団は上掛けもフワフワであったかい。お風呂上りにコーラルと長話してしまったために湯冷め気味だったから、あったかい布団が気持ちいい。

もうこのまま夢の世界へ一直線　のはずだったのに、耳元で声がした。

『ホタル、ねえ、このまま寝ちゃうの？』

小さな子供のような透き通った声。いつかも聞いたような声だ。

でも、この世界に来てからまだ名乗った覚えのない、私の名前を呼ばれた？

驚きで、さっきまでの眠気も消えた。

「誰？」

慌てて起き上がってみても、それらしき人影はない。

気のせいか…と再び寝ようとしたら、天蓋のレースがめくられた。そして、外の人物とばつちりと目が合う。

「な、な、なにしてんの!？」

思いつきり布団を手繰り寄せた上に、反対の端ギリギリまで体を寄せながら叫ぶ。

そういえば完全に魔王の存在を忘れていた。

思い出したが最後、コーラルに言われた『初夜』の一言が頭を駆け巡る。

やばいよやばいよ、貞操の危機だよ……!!

「何してるも何も、ここは俺の部屋だ。
俺様が俺様の部屋のベッドで寝て何が悪い」

「え……?」

「本来ならお前には客間を用意する予定だったが、諸事情によりできなくなつた。

仕方がないから俺のベッドの片隅を貸してやる。だからさっさと寝てしまえ」

「ええ……?」

あれ?何か思つてた流れと違う。

何その投げやりな感じ?

何?ホントに普通に隣で寝るだけ?

なんかもう、有無を言わず無理やり 的なものを想像してただけ。

”もうお前は俺の後なのだから言うことを聞け〜” みたいなの。

あ、いや、そんな期待してたなんてことはないけどさ!!

「何を百面相してるんだ。ホントにお前は変わった奴だな。

…まあでも、俺はもう疲れた。お前ももう寝ろ。

詳しい話はまた明日、朝になったら話してやるから」

「え、あ、はい…。おやすみなさい」

なんかホントにめんどくさそうに、しかも子供に言うみたいに見える。なぜだか素直に頷いてしまった。

私が頷いたことに満足したのか、はたまた私の返事なんてどうでもよかつたのか、魔王はそのまま布団に入り、ベッドに横になってしまった。

固まつたままの私をよそに、しばらくすると寝息らしきものが聞こえてきた。

マジで寝たのか??

そりゃ、襲われたいわけではないけれども、ここまで無関心を通されるとなんか空しいものがある。

一応年頃の女ですし、なんだかセクシーな寝着も着させられてるわけですし？『初夜』らしいしさ。

そんな男女2人がベッドの上で……。

はあ、なんか考えててめんどくさくなってきた。何にもないならそのほうがいいし。

罨とか、油断させといて……的なオチもなさそうだし、マジでこのまま寝ようかな？

最後にそつと、隣（といってもベッドがめちゃ広いので距離は1メートルくらいある）に眠る魔王の顔を覗く。

寝ている顔も、たいそうなイケメン。

なんだこのまつ毛は！！

なんだこの無駄に通った鼻筋は！！

くそう、よだれでもたらしたら愛嬌もあるものを……。

人をさんざん弄んでおいて（被害妄想？）澄ました顔で寝やがって……。

くやしいので奴の鼻をつまんでやった。

どうやらすぐには起きそうにない。

10秒くらいつまんだままでいたら、

「くっ……」

と苦しそつに眉間にしわを寄せた。

魔王も寝るときは鼻呼吸らしい。

ま、少しスツとしたかな。

今日はこれくらいで勘弁しといてやろう。

そして私は、魔王の横で眠りに落ちた。

第8話 魔王様は鼻呼吸（後書き）

ようやく登場の魔王様なのになんかそっけない…。

主人公の名前は蛍ちゃんに決定！！

今回は宝石・色関係で名前を付けていこうかと計画中。

コーラル 珊瑚 ホタル フローライト（蛍石）

魔王様の名前はまた次回にでも。

お気に入り登録200件突破、ありがとうございます！！
誤字報告・感想等お待ちしております

第9話 二つの太陽とピンクドレス

次に起きたら、ベッドに寝ているのは私一人だった。

ベッドがふかふかだったおかげか、すごぶるよく寝た。

ものすごい低血圧な私がこんなにスッキリ気持ちよく起きれるなんて奇跡に近い。

まあ起きたら元の世界という奇跡は起こってなかったのが残念だ
けど。

「ん~~~~!!」

ぐいっと伸びをしてベッドから降りる。

いつの間にか窓は開けられ、気持ちのいい光が差し込んでいる。

昨日は気づけば夜だったし、慌しくて外なんて見てる余裕なかったけれど、窓の外を見る限り、元居た世界とそう変わりなく見える。魔族やら魔王様なんてものが居るくらいだから、もっとどんよりした暗い世界を想像していたんだけど、どうやらそうでもないらしい。キレイな青空を見るとなんだか安心する。

でも……なんで太陽が2つもあるんだろう……？

青い空の上に、よく知る太陽より一回り大きなものと、一回り小さいものが二つ、燦々と輝いている。色・形は一緒なのに、なぜ二つも……。

「なんか、暑そう……」

「今は秋だから、むしろこれから寒くなるぞ」

ポツリともらした独り言に返事があつたことに驚き、部屋を見回す。

すると、ベッドから少し離れたところにあるテーブルセットで優

雅にくつろぐ魔王様がいらっしやっただ。もちろん、顔には例のニヤリとした笑みを浮かべて。

「お前は女としての自覚はないのか？」

「はあ？」

自覚といわれても…と見下ろせば、思い切りよく寝着が乱れていた。

胸はきわどいところまで見えてるし、裾もめくれ上がっている。紐パンが日の光にさらされているなんて…！！

「見るな！！この変態！！」

慌てて乱れを直し、尚且つベッドからシーツを剥ぎ取り体に巻く。くそう、あんな姿を見られるなんてっ！！

けどけど、見てるなら見るでもっと早い段階で声かけたらいいじゃん！！

そのままじっと見てるなんて、さてはむっつりだな。

よし、これからはむっつり魔王と呼ぼう。

っていうか、そもそもこんな寝着しかくれないのが悪いんだし。私は夏でも腹巻必須なくらいのデリケートな体なんだから。

お腹が冷えたらどうしてくれる。冷えは女の天敵なんだぞ！！

「そろそろいいか？」

「…どうぞ」

脳内暴言にもひと段落付いた場合だったので、魔王の発言も許可してあげた。

私は心が広いから、むっつり魔王にだって優しいのですよ。

そんな私に、これ見よがしにため息ついてみせるってどういっつとむっつり魔王は困ったものだ。

これだからむっつり魔王は困ったものだ。

「お前、思ってることが顔に出すぎだ。完全に俺の悪口を言った
だろう。」

まあ…とりあえず、服を用意させるから着替えて来い」

ため息共に吐かれた言葉と共に、昨日お世話になったコーラルが
入ってきた。

彼女が持ってきた着替えを手に別室へ。

ともかくちゃんとした服を着ないと落ち着かないのは確かなので、
魔王の言葉はありがたい。

まあ、そもそもの元凶は彼なのでお礼は言わないけどね。

コーラルが持ってきたのは、長袖のワンピース型の膝丈スカート。
色がピンクでレース付きというのがちょっとどうかと思ったけれ
ど、まあ普通の服だ。

寝着に比べればものすごくマトモ。

やれば出来るじゃないか。

「それにしても、后様はすごいすわね」

「え、何が？」

着替えの最中、コーラルが嬉々として話しかけてきた。

朝起きて着替えるだけで、何がすごいのか？

「魔王様を変態扱いしてなんのお咎めもなしだなんて、考えられま
せん。」

まあ魔王様と一夜共に過ごすだけでも、通常の魔族でしたら魔王様
の魔力に当てられて危険な状態になっているでしょうけれど」

「え、え、どういうこと??」

「昨晚は何にもなかったんですね？ 后様の魔力に変化がありま
せんものね…。」

でも、魔王様のご機嫌がいいようですから……口付けくらいは交わされました?」

「え? ちょ、待って、魔力とか変化とか、どういうこと?」

わからないことばかりで、しかもお咎めやら魔力に当てられるやら物騒な言葉も出てきて不安になる。

魔王と居ることは思ってるよりヤバイことなんだろうか?

「あら。魔王様はまだ何も話されてないのですね。」

「うん、ぜんぜん」

「ではこれから話されるおつもりなのでしょう。」

私からお話するより魔王様から聞かれるほうがいいですわ。

会話を通して二人の距離が縮んでゆくのですわ!!」

「いや、縮める気はないけど……」

コーラルのテンションについていけない。普通にしてたら丁寧な侍女さんなのに、時々変なスイッチが入るのはなんなんだろう。

正直、恐い。

なんだかんだで着替え終えるのに30分くらいかった。

コーラルとの乙女トーク(?)もさしたるもの、ドレスがなかなかにフクザツな作りだったのだ。

コーラルがテキパキ着付けてくれたけれど、これを自分ひとりで着られる自信はない。

そんなドレスだけれど、思いのほか私に似合っていた。

28でフリフリのピンクワンピースはどうかと思っただけけれど、落ち着いたピンクで、しかもレース使いもメリハリを利かせてあって子供っぽ過ぎない。ちょっと胸元が開いている気もするけど、これくらいは許容範囲かな。

昨日のセクシー寝着もあれはあれでデザイナー的にはいいものだったし、案外センスはいいのかもしれない。ま、それより何よりさっさともとの世界に帰って欲しいというのが一番だけど。

着替えて元の部屋に戻ると、出て行ったときと同じ状態で魔王が座っていた。

暇なのだろうか。

さて、これからのお話を聞きますか。

第9話 二つの太陽とピンクドレス（後書き）

思ったより話が先に進みません…。

次こそ魔王様がちゃんとしゃべります！

第10話 闇夜の満月

「そこへ座れ」

可愛げなドレスに着替えて、髪も結ってもらって、プチ変身した私に向かって、魔王はそっけなくそう言い放った。

いやさ、別に褒めて欲しいとかそういうんじゃないけどさ、一応今まで着た事ないような服着てるわけだし、ちよつと第三者的な人の意見も聞きたかったというかさ…。なのに人をさつと一瞥しただけで放置ってなんかヒドイと思う。

まあ彼氏彼女でもあるまいし、こつちではこんな服だつて当たり前なんだろうけどさ。

ブツブツ口の中だけで文句を言いながら、魔王に促された椅子に座った。

若干不機嫌なまま、正面に座る魔王を見ても、彼は相変わらず表情が読めない。

そういえば正面からこうやってちゃんと彼を見るのは初めてかもしれない。いつもなんだかんだで落ち着いてよく見れなかったし（寝てるときは別にしてけど）。じっくり見れる余裕がなかった。

よく見ても、やっぱりイケメンだ。

黒い髪は短いのにキューティクルがツやつやしてるし、浅黒い肌になすと通った鼻筋が男らしい。足も長いし、髪の間にはチラリと見える角がなければ外国のモデルっぽい。ってか、角って…ホントに魔族なんだよねえ。尻尾とかもあるのかな？こんなモデル風なイケメンに尻尾って…機会があれば見てみたい…。

あと、寝ている時はわからなかったけど、長い前髪に隠れている瞳は明るい金色。服も含めて全身黒で満たされる中、瞳だけが輝い

て見える。蜂蜜色で、キレイ。

「お月さまみたい」

思わず漏れた心の声に、魔王の顔がわずかに歪んだ。しかも、負の方向に。

昨日こつちに来てから嘲笑が無表情のどちらかしかかった彼が見せた初めての表情。

興味なさ気だった視線が一転した。

とたん、魔王から黒い霧のようなものが溢れ出す。

なんなのさ?? 私そんなに気に触ること言った??

「あなたの目、満月みたいですごくキレイだと思っただけなんだけど…」

黒いオーラに押されて、恐々告げる。

「キレイ…この目が?」

「うん。夜の闇を照らす満月って感じで、キレイ。

前髪なんかで隠さずもつと見せたらいいのに」

キレイなものをキレイと言って何が悪い? せっかくキレイな色なのに、隠したらもつたいたいじゃないか。そう言つと、魔王の表情が少し、和らいだ。

「やっぱりお前は変わっている」

「で、何が聞きたい?」

なんだかわからないままに勝手に変わり者扱いされて、気が付いたら黒い霧もなくなっていた。

そして、無表情に戻った魔王からの質問。

「何がと聞かれると…とりあえず…」

きゅ〜〜ぐりゆるるう〜

質問をしようとしたところで、お腹がなった。うん。もちろん、私の。

だって、しょうがないじゃない。

そりゃ、昨日の夜バームクーヘン食べたけど、もう朝だし、私は朝からすっかりご飯食べる派だもの！！

…恥ずかしいのは恥ずかしいけどね。

羞恥に下を向いた私の耳に届いたのは、魔王の馬鹿にした笑い。

これで何回目だろうか、こうして鼻で笑われるのは…！！

まあさっきみたいになんかどこか悲しそうににらまれるよりはいいけど。

って、大変だ、イケメンに惑わされてる！！

「また何を一人で百面相してるんだ。 食わないのか？」

一人あわあわしてる間に、目の前のテーブルに朝食が用意されていた。

い、いつの間に…。

「食わないなら片付け」

「食います！！」

魔王が言い終わる前にさえぎり、食事にかかる。

腹が減っては戦は出来ぬってね…って、これ前にも言った？

まあともかく、私にとって食事はかけがえのないものなのですよ。

朝食はサンドイッチっぽいもの。

見た目はサンドイッチなんだけど、中身がいまいちよくわからない。やけに鮮やかなピンクとか、真っ黒いどろっとした何かとかが、パンっぽいものに挟まっている。

そういえばここ、魔界だった。…食べれるだろうか…？

「人間が食べても支障のないものを用意した。安心して食べる」
そう言いながらも、魔王の前には食事はない。
優雅に紅茶を飲んでいるだけだ。

というか、その紅茶何杯目？ 横からコーラルが給仕する様子は
すごく絵になる光景だけど…お腹チャポチャポにならないだろうか？

「あなたは食べないの？」

「俺はお前が腹を出して寝ている間に食べた」

「あ、そう…」

いちいち嫌味が癪に障る奴だ。

怒りに後押しされて、サンドイッチもどきに手を伸ばす。

「おいしい…」

ピンクはさつぱりとした甘さのジャムっぽいものだった。黒いのは
予想外にタマゴっぽい。どちらも意外とおいしい。他にも黄色い
キュウリっぽいものとか、緑のシーチキンっぽいものとか。

結局”っぽい”わからないのがくやしところだけど、またおい
おいコーラルにでも教えてもらおう。

「私、元の世界に還りたいのだけど」

朝食を無事に胃に収めて紅茶を頂いてから（紅茶は元いた世界の
ものと変わりないものだった）、やっと魔王に切り出した。

魔王の答えは…

「それには、条件がある」

第10話 闇夜の満月（後書き）

ようやく魔王様の容姿描写。個人的に男性の長髪って苦手なので短髪設定なのですけどいかがでしょ？

主人公が自由すぎて話がなかなか進みません…。

次話、魔王様の出す条件とは？

誤字脱字の指摘・感想等お待ちしております！

第11話 還るための条件

聞きたいことと言われて、いろんなことが頭をよぎった。ここはどこなのかとか、私はどうなるのかとか、そういえば魔王の名前を聞いてなかったとか、魔族って人間を食べたりするのかとか…。

「ご飯を食べながらも、何をどう聞いていこうか考えたけど、まず、聞きたいこと、というか、訴えるべきことは『元の世界に還りたい』ということ。それが叶うならばいろんな疑問も帳消しになる。変な夢を見た、そう思っただけで終了だ。」

けど、魔王様の答えは…

「それには、条件がある」

まあ、素直に還してくれるとは思ってなかったけど、そう言われて不安になる。

ここに来てからの記憶を消されるとか？ そんなの別にかまわないけど、相手は魔族の王だし、生き血を、とか純潔を、とか言われたらどうしよう？ 私貧血気味だから、献血も断られるのに… 純潔ってのは 残念ながら十代の頃に純潔ではなくなってるんだけど そんな私でも有効事項？ 純潔でないなら命を取られるとか になったらどうしよう？ 遺体だけ元の世界に戻されるとか！！

「そろそろいいか？」

思考がどんどん悪い方向に向かっていくのを止められた。あれ、前にもそのセリフ聞いたことあるような？ けど、まだ答えを聞くのが怖い。

「その条件というのは…」

何も答えないのを了承の意味で取ったのか、魔王が話し始めた。待って、まだ心の準備があゝゝ！

あわあわしている私を見て何か感じたのか、魔王が言葉を止めた。

「…お前は本当に元の世界に還りたいのか？」

少し迷って、口にした魔王の顔は、なぜだか少し、悲しそうに見えた。

そう言われて、考える。私は本当に、元の世界に還りたいと思っているのか？

もう28で、若干行き遅れなのに彼氏も居ない。両親は元気だけど、もうとっくに親離れはしている。仕事は張り切ってやってたけど、それだって私じゃなくても代用の利く仕事なのかもしれない。友達もみんな結婚して、家庭が優先で。私は、ひとり…。

本当に、還りたい??

ここに残れば、魔王の后。 とうなるかはわからないけど、悪いようにはならない気もする。

けど…。

「還りたいわ」

ここは、私の居るべき世界じゃない。

どうしてかはわからないけど、そう思った。

太陽が2つある以外は知っている世界と同じに見える世界。料理

もおいしかった。伴侶となる魔王は飛び切りのイケメンだ。

けど、魔王のまとう黒い空気が、あたりに漂うもやのような何か
が、ここは違うのだと言っている。

私の居るべきは向こうの世界、結婚相手も、向こうのヒト。こんな
ヒラヒラな服装でキレイにしてるのは私じゃない。私は、ただの
地味メガネで充分。

「そうか…」

きつぱりと意思を表明した私に、魔王はやっぱりどこか寂しげに
そう答えた。

今までの皮肉な笑みが消えたその顔に、少しばかりの罪悪感を感じ
てしまう。

けど、仕方のないこと。私はこの世界の人間ではないのだから。

「では、条件を言おう」

魔王は元の感情の読めない無表情に戻っていた。

私も今度は落ち着いて、次の言葉を待つ。

けれど、それに続く言葉に耳を疑った。

「俺様の子供を産んだら、元の世界に還してやる」

…えつと……???

第11話 還るための条件（後書き）

今回ちょっと短め。

主人公が自由すぎて困ってます…。今回ちょっとシリアスちっくになつてましたけど、基本樂觀的な彼女。
魔王様との条件交渉は次回に続きます。

第12話 条件その2

正直、耳を疑った。

「俺様の子供を産めば、元の世界に還してやる」

マジで、俺様発言もいいところだ。

なんで好きでもないやつの子供を産まなければならぬんだ!!

そのための行為すら絶対にお断りだし!! だいたい、女性を子供を産む道具としか見てないような発言に腹が立つ。

「私は好きなヒトとの子供しか産む気ないし、それくらい好きなヒトとならずと同じ世界にいたいと思うし。 っていうか、なんであんたの子を産まなきゃいけないのさ!!」

そりゃ、王様なんだし、跡取りが必要なんだろうけど?

けどさ、王様なんだから、ゼヒ私が!! って姫様がいっぱい居るでしょうに。なんで私とその相手にならなきゃいけないのさ。

王様は王様らしくハーレムでウハウハしてたらいいじゃん!!

「そう言うと思ったよ。

ま、それもひとつの条件だ。俺様は魔族の王。俺の後の座を望むものは多いが、俺の魔力が強すぎるために該当するものが居ないのが現状だった。それで異世界召喚という手段に出たわけだ。

俺としてはお前が気に入っているから、ずっと側にいればその方がいいが、最悪、後継者となる子供がいればお前は還してやってもいい。お前との子なら強い子が生まれるだろうからな」

気に入ってるとか言いながら、なんでそんなモノみたいに扱われなきやならんのだ！

いい加減イライラしてきた。まあさつきから腹が立ってるけど。

「ここでは魔力の弱いものは強いものに完全服従だ。お前のように敵意むき出してくるやつは今までいなかった。お前の相手は面白いよ。だからこそ、お前との子を欲しいと思う」

聞きようによつてはプロポーズとも取れるセリフ。けど、彼の声音にも表情にもそんな甘さは一切ない。あるのは、どこかこちらを見下したような笑みだけ。

「そんな言葉でごまかされないからね！！ 私はあんた相手で全く面白くないし！ もっとあなたに従順なヒトを召喚でもなんでもしたらいいじゃん！」

魔力云々はさっぱりわからないけど、私を召喚したように、もっと喜んで魔王との子供が欲しいって思うヒトを呼んだら良いんだ。顔はいいんだし、王様なんだし、望むヒトもいるだろうさ。

私はムリだ。顔は好みだけど、こんな風にヒトをモノ扱いする奴は願ひ下げ。

「そうはいかない。お前の召喚にも、けっこうな準備と魔力が必要だったんだ。

次に召喚の儀をするためにはあと20年はかかる」

「なにそれ！ そんなの私の知ったことじゃないし。

……ってというか、私を還すのもそれくらいかかるんじゃないの？」

召喚の準備に20年かかるのならば、私を還すのにだって同じくら

いかるだろう。

20年とか冗談じゃない。還れる頃にはおばちゃんじゃん。

「還すのはそこまで難しくない。対象物も送還場所もわかっているからな」

「じゃあ還してよ。今すぐ！」

「それは出来ないと言っているだろう。そのための条件交渉だ」

「だからあんたの子供なんて産みたくないって言うてるでしょう！」

淡々と話す魔王にイライラが募る一方だ。交渉も平行線だし。

なんだよ勝手に人をこんなとこ連れてきて条件だの子供だの。冗談じゃない。

「このままお前を還してしまつては、俺様になんの利益もない。だから、お前を還す代わりに子を残せと言っている。

……が、それも嫌だと言うのであれば、それを覆すくらいのもを……」

言いながら、何やら思案してにやりと笑う魔王。

利益とか知らないし、むしろ私には始めから損失しかないんだけど。ともかく、魔王の笑みが、それに続く言葉が恐い。

「そうだな……俺を、完全にお前に惚れさせてみる」

「……はあ??？」

なんて言うか、開いた口が塞がらないってのは意味が違うか？ と
りあえず、意味がわからない。
そこに何の利益があるというのか。

「本当に馬鹿そうな顔をするな」

「な……！！」

「感情が顔に出過ぎなんだ。意味がわからないと顔に書いてある」
「まあ…そうね。なんであんなに私に惚れたら還してくれるのさ」

普通逆じゃない？ 嫌われたら子供も作りたくないからさっさと還
れって感じにならない？ なのに惚れたら還すって…好きならずっ
と側に居て欲しいものじゃない？

「まず、俺は本当に嫌いな奴とは同じ空気を吸うのも嫌だ。そんな
奴を俺様の魔力を使ってまで元の世界に還そうとは思わない」

そこで言葉を切った魔王の表情は、冷気をはらんだ笑顔。

言外に、嫌いな奴は殺す、そう言っている。 私も嫌われれば殺さ
れる…??

「そ、それじゃあ、なんで…」

「好きな人とは同じ世界にいたいと思う、そうお前は言ったが、そ
れくらい好きな相手がそうは思ってたらどうする？ 想い相
手が元の世界に還りたいと心から望んでいるのなら、それが惚れた
相手の願いならば、叶えてやりたいと思うだろう？」

上ずった声で尋ねた私に、魔王はどこか楽しそうにそう答えた。

そうだろうか？ 片思いの相手が、一緒に居ることを拒んだら…違
う世界を望んだら…私ならどうするだろうか？

ムリにでも一緒に居て、心変わりを待つ？

自分の幸せより、相手の幸せを願う？

目の前の男はそれよりも、無理やりにでも心を手に入れようとしそうだけど、違うのだろうか？

「俺がそんな優しい男には見えないって顔だな」

「う、うん」

「まあ実際そこまでヒトを愛したことはないし、これからもそんなことはないだろうと思うが、もし俺がお前に惚れて、お前を愛して、それでもお前が心から元の世界に還りたいと願うのならば、この命に誓って、お前を元の世界に還してやるよ」

そう言う魔王の真剣な瞳に、不覚にもドキリとしてしまう。

「ただし、その時お前に少しでも迷いがあれば、子供でもなんでも孕ませてやるから覚悟しろよ」

にやりと笑って言った魔王に、そんなことあるわけないじゃん、と強くは言い返せない自分がそこに居た。

私、ホントに元の世界に還れるかなあ…。

第12話 条件その2（後書き）

お気に入り登録400件突破、ありがとうございます!!
感想も頂けるとものすごい励みになります。

魔王とホタルの話し合い？はまだ続きます。

第13話 人間の魔力

情報を整理しよう。

ここは魔族の国。私はここの魔族の王様の后候補として召喚された。魔王の后になるにはある程度魔力が強くないといけないらしい。つまり、私はけっこうな魔力を持っているらしい。

私のように異界からヒトを召喚するにはいろいろと準備が必要で、更に大量の魔力が要るので、あと20年は新しいヒトを呼ぶことは出来ないらしい。そんなの知るかっただけで、魔王は独身で后に見合うだけの魔力を持つヒトが居なくて案外焦ってるみたい。だから、還すことは簡単だけど、そう簡単には還してはもらえない。

私を還すために魔王が出した条件は、『魔王の子供を産む』または『魔王を私に惚れさせる』こと。

なんていうか、なんていうか…私、不利じゃない??

私は現在28歳。一応今まで彼氏と呼べる男性がいたことはある。けど、それも片手で数えられるほど。容姿も中身も、全くモテる要素はないと思う。…自分で言いきっちゃうのも悲しいけどさ。

そんな私に、惚れさせる??
ムリだね。

じゃあ、彼の子供を産む??

それもムリ。好きでもない相手となんて、絶対にヤダ。還るためとかそんなので割り切れない。

しかも、産んだ子供を魔族の国に残してなんて、私一人で還れるわけない。

なら、どうする??

「ねえ、私ってそれなりに魔力つての？ いったい持つてるんだよね？
それで自力で還ることってできないの？」

「還してもらえないなら自分の力で何とかするしかない。」

「魔力とか自分ではさっぱりわかんないんだけど、あるものなんだろうか??」

「私を簡単には還さないと言っている本人に聞いたところで答えられるとは思ってなかったけど、今のところ彼に聞くしか仕方がないけど、案外簡単に答えをくれた。至極あっさり。」

「まあ、無理だろうな。」

一言で、わずかな希望の光が消える。

「なんで!??」

「確かに、お前には魔力がある。だが、人間であるお前には魔力を使う機能が備わっていない。」

「体内の魔力のおかげで治癒能力が高まるだとか、周りの空間の魔力を感じるくらいはできるかもしれないが、その魔力を使って攻撃だとか召喚だとか、他に影響を及ぼすことはできない。」

「なにそれ!! 人間ってだけで無理なの?? 全く??」

「人間とはそういうものだ。もともと魔力を持っている人間が少ないのだから仕方がない。」

「俺たち魔族のように、魔力を外に出す機能が元々ないんだ。」

「そんなあ...」

「そんな不公平な話ってない。」

「せっかく魔力なんてのを持つてるらしいのに、それを使うことがで

きないなんて!!

不公平だ。人種差別だ。

治癒能力が高まるとか…そういうえば、私怪我しても治るの早いなあとか思ってたけどさ。ただの健康優良児だと思ってたのに…。周りの空間の魔力を感じるとかは意味わかんないし。現代日本で魔力とか言われても…。あ、でも……

「そういうえば、私のメガネってどこにあるの？」

ふと、この世界に来てからなくなった私の相棒を思い出した。

引き出物は大事に置かれてたのに、メガネはなかった。どこかにしまってもらってるといいんだけど。見ることにそこまで不自由するわけではないけど、長年愛用してきたあのメガネは特別品なんだ。

「ああ、あれで体に傷でもつけられたら困るのでコーラルに預けてある。

必要か？」

「今すぐでなくていいから返して。ちょっと試したいこともあるし」「そうか」

試したいことの内容も聞かずに了承された。なんていうか、聞かれなくても上手く答えられないからいいんだけど、彼の私に対する興味ってそんなもんなんだろうかかと思ってしまう。まあ、そんなもんなんだろうけど。

惚れさせる、なんて、やっぱり絶望的に無理っぽい。

「ねえ、他に何か方法はないの？ 私が還れる方法」

出された2つの条件は、どう考えても無理。自力でも還れないなら、

もうどうしようもないんだろうか？

「自信がないのか？」

「ないわ」

惚れさせる自信なんてあるわけない。

はつきり言い切った私を、魔王は一瞬驚いて見て、次の瞬間、楽しそうに笑った。

…そんな風に笑われると、惚れさせる前に私が惚れてしまいそうな錯覚に陥る。

いやいや、こいつは女を子供を産む道具としか思っていないような鬼畜なのよ。むつつり魔王なんだよ。騙されてはダメだめ。むつつり鬼畜魔王、むつつり鬼畜魔王…

「はあ…」

ぶつぶつ自分に暗示かけてたら魔王にため息をつかれた。失礼な。

「そうだな、ここは魔族の国だが、精霊も存在している。

それら精霊の力を借りられるようになれば、俺様の魔力なしでも元の世界に還れるんじゃないか？」

「……精霊？」

たぶん魔王からの譲歩なんだろうけど、精霊って、何???

第13話 人間の魔力（後書き）

次回、精霊の説明入ります（たぶん…）
メガネの話はまたその後で。

第14話 精霊と俺様魔王

「精霊つて、なに？」

私のもつともだと思われる質問に、魔王は深いため息でもって応えてきた。

つくづく失礼な奴だ。

「だって、私の世界にはそんなのいなかったんだもん。教えてくれたっていいじゃん」

少しすね気味に言ってみたけれど、ちょっと言い方が子供っぽくなってしまってなんか若干恥ずかしい…。もう28なんだから、年相応のしゃべりをしないと。なんかこっちにきてからどうも調子が狂って困る。

「…精霊は自然界を支え、自然の力を使う。普段目には見えないが、そこかしこに存在する。

魔族は精霊の力は使えないが、人間であるお前なら力を貸してもらえるんじゃないか？」

私の挙動不審っぷり（自分でも自覚はある）も気にせず応えてくれた。彼は案外いい奴なのかもしれない。

「どうしたら貸してもらえるの？」

「そこまでは教えられないな」

「な、なんで!？」

「何度も言うが、俺様はお前に還ってほしくはないんだ。なのにとっして還るための手助けをそこまでしなくてはいけないんだ。ここまで教えてやっただけ感謝してほしいもんだ」

前言撤回。やっぱやな奴だ。

でもとりあえず、還る糸口は見つかった。どうしたらいいかはまだわかんないけど、この世界の自然にいる精霊さんをつまえて力を貸してもらえばいいんだ！

ちよつと希望が見えてきた。

「もうひとつ補足しておいてやると、お前が還るにはそれなりの膨大な力が必要だ。精霊一匹くらいの力じゃ到底還れないから気をつけろよ」

希望が見えて表情を明るくした私に、ニヤニヤ笑顔の魔王が補足説明してくれた。なんだか先は長そうだ。

ところで、精霊つて一匹二匹で数えるのか？つていうか、精霊つてそんなにたくさんいるのか？ 精霊つてどんなものかもわからない私にそんなこと言われてもって感じだけど、たぶん、いやきつと、私の気持ちに水を差したかっただけに違いない。

現に、還る道は長そうだとちよつと気持ちが落ちてしまっている。そんな私を見て、魔王は嬉しそうに、いたずらが成功した子供のように笑ってるし。

やっぱいいやな奴だ。

「さて、他に何か聞きたいことはあるか？

俺様はお前と違って忙しい。あまりお前にはかり時間を割いているわけにはいかない」

「あ、ごめん、えつと…」

つて、そつちが勝手に私を呼んだわけだから、説明責任はそつちにあるでしょ！？ 私だつて元の世界でなら忙しいわい！！ なん

でそんな恩着せがましく言われなきゃならんのだ！

まあでも、仮にも魔王なんだし確かに忙しいんだろっし…なんて考えちゃう私ってお人よし…。

「あなたの名前、なんていうの？」

そもそも魔王に名前ってあるんだろうか？とか思わないでもなかったけど、それならそれで魔王と呼ばばいいわけだし。会話をする上で相手の名前を知らないってなんか気持ち悪い。

「知ってどうする？」

「え、どうするって、名前を呼ぶけど…。何、こっつて名前を呼ばない文化のところ？」

そしたら私はあなたをなんて呼べばいいわけ？」

知ってどうするとか、そんな返事が返ってくるとは夢にも思わなかった。世界が違うと文化も違うってことだろうか？けど、コーラルは普通に名前教えてくれたけどなあ？ 変なあだ名で呼べとか言われたらどうしよう？

っていつか、私も魔王に名前言ってないし。…聞かれてもないけど。

「私の名前は蛭。さっきからずっとお前って呼ばれてるけど、名前で呼んでくれたほうが私は嬉しい。

私は魔王とでも呼んだらいい？」

魔王が返事をくれないので、今のうちに自己紹介。ずっとお前とか言われてるのに若干むかついてたしね。名前って大事だと思うわけですよ。

「俺様の名前はコクヨウだ。コクヨウ様でも魔王様でも好きなよう

に呼ぶといい」

散々ためといてその返事ってどうよ？

その上から視線はなんともならんのか？

魔王様だから無理なのか？

「じゃあコクヨウ、これから還るまでの間だけよろしく」

魔王の意見は無視して呼び捨て。鬼畜むっつりな俺様魔王には呼び捨てで充分ですよ。

「ホントにいい根性してるな。まあよろしく、ホタル」

苦虫を噛み潰したような表情でよろしくとか言われても、ぜんぜんよろしくしたくない。

ってか、初めて名前を呼ばれて鳥肌がたった。気持ち悪いとかじやなく、なんか性的な感じで…。色気のある声で名前呼ぶのは止めて欲しい。…名前教えるんじゃないかかったかも。

「あ、あと、私はどこの部屋に行けばいい？　ここってコクヨウの部屋なんだよね？」

話は終わったとばかりに席を立とうとするコクヨウに慌てて質問する。

人の部屋にひとり残されても、居心地が悪くて仕方がない。后として召喚したわけだから、客間くらい用意してあるだろうと思って質問だったんだけど…

「ここに居ればいい。その方が、子供を作るにも俺様を惚れさせるにもちようどいいだろう？」

「え、そんな、ちょっと!!」

ありえないセリフを残して魔王様は出て行ってしまいました。

子供作る気ないし!! 惚れさせるなんて無理にきまつてるし!!

そろりと部屋を見回しても、ベッドは昨日魔王と寝たひとつだけ。

…私、これからどうなるんだろう…??

誰も居なくなった部屋で一人、途方に暮れた。

第14話 精霊と俺様魔王（後書き）

ようやく魔王の名前が出せました。黒曜石からとって、コクヨウです。

長い名前を考えるのが苦手なので家名云々は省略で。

第15話 淫魔とメガネ

さて、どうしよう？

一人残された魔王改めコクヨウの部屋で途方に暮れる。

私の暗い気持ちをよそに、日は燦々と降りそそいでいてなんだか現実味がない。これからどうしたものか…とりあえず、部屋を見回してみる。

何度見ても広い部屋は、私の部屋が4〜5個は入るんじゃないだろうか？ってほどの広さ。

そんな広い部屋の真ん中に置かれた馬鹿でかいベッド。ベッドのほかは今居るテーブルセットと、壁際の棚、あとはソファークセットがあるだけのシンプルな部屋。すべて高級品でしつらえられてはいるけれど、それも嫌味にならない落ち着いた部屋。くやしいが、私の好みだ。

それにしても…やっぱりベッドはひとつだよな？ 昨日は客間が用意できなかったとか言われたし、眠かったからつい一緒に寝ちゃったけど、このままなし崩しに一緒に寝るわけにもいかない。客間がダメなら、あっちのソファークでも寝よう。大きさも私が寝るくらいはあるし。いざとなれば絨毯だっただけフカフカなら絨毯の上だってかまわない。自分の身は自分で護らねば！！

あんな奴の子供なんて作ってたまるか！！

「后様、失礼いたします」

ひとりで握りこぶしを突き上げていた背後からの呼びかけに、心臓が飛び出るかと思った。

振り返ればそこにはコーラルの姿。そういえばいつの間にか部屋を出てたんだ。

「お茶のおかわりいかがですか？」

「あ、ありがとう」

にっこり微笑む白銀の侍女は、日の光のもとで見ても美しい。

白銀だと思っていた髪は、光に透けて淡いピンクに見える。瞳もきれいなピンク色。コーラルという名の通りの珊瑚色だ。癒しの微笑みを浮かべる様は天使か妖精かと思えるほど。

それか、コーラルが精霊さんではなかるうか？

精霊がどんな姿をしているかわからないけど、私の想像では人型なら美形に違いないと踏んでいる。

「コーラルって精霊なの？」

「いいえ、私は淫魔ですわ」

「インマ……？？」

疑問はとりあえず聞いてみようかと問うてみたら、あっさり否定の言葉が返ってきた。

「っていつか、インマ？ 淫、魔……？？ 淫らな、魔族……？？？」

聞こえた単語を脳内変換させて、愕然とする。この清楚そうな美女が、淫魔ですと……？

「はい、淫魔でございます。ヒトの精を糧に生きております」

そんなステキな笑顔で、精とか言わないで頂きたい。

「あ、后様の精を奪うことは禁止されておりますのでご安心を」

「え、あ、はい…」

一瞬、笑顔が獲物を狙うものになった。気がした。

っていうか、禁止されてなかったら奪う気ですよ？ チラリと見えた舌がなんかすんごいエロいんですけど！？ 隙あらばみたいなそんな感じ？？ さっきまでの可憐な天使はどこに？？？

「ところで、どうして精霊など？」

私の怯えた様子を察したのが、コーラルが話題を変えてきた。笑顔も元の天使の笑顔に戻っていて安心する。

「私は魔力が使えないから、精霊の力を借りればいいってコクヨウが言ってたから」

なんとなく、元の世界に還るためとは言わないほうがいい気がする。ニューアンスを変えて聞いてみる。まあそれでも間違いではないしね。

「コクヨウとは魔王様のことですわね！！ もう名前で呼び合う仲間だなんて！！ ステキですわ！！」

「え、ちょっと…」

言った内容とは違うところに食い付いてきた。何、名前で呼ぶってそんなにたいそうなことなのか？？ やっぱ魔王と呼んだほうがいいんだらうか？

「あ、精霊のことでしたわね」

「そうそう。精霊。どうやったら力を借りれるか、魔王は教えてくれなくて。」

「コーラルは知ってる？」

「いえ…。私も精霊を見ることは出来ませんから…。」

精霊は魔力が高いものでしか姿が見れません。また、魔力が高くて
も精霊に嫌われていては姿が見れません。魔族は自分の魔力が使える
こともあつて、精霊の力を必要としていません。そのせいか、精
霊にも好印象は持つてもらえないらしく、魔族で精霊の姿を見れる
ものはほとんど居ないと聞いています」

「そうなの…。」

がつくりと肩を落とした。

姿も見せない精霊たちの力を借りるなんてどうしたらいいんだろ
う？

とりあえず、コーラルが注いでくれた紅茶を飲む。

ほんのり甘いお茶にほっこり落ち着いたところで、ひとつ思い出
した。

「コーラル、私のメガネ、持ってる？」

「あ、はい。お預かりしております」

ずっと出されたコーラルの手が淡い光に包まれたと思つたら、そ
の手に見覚えのあるメガネが現れた。何度見ても魔力つてすごい。
こんなすごい力があるのに、私には使えないなんて…。

「わずかにですが、こちらに魔力が感じられましたので、一時お預
かりさせていただいております」

メガネを差し出しながら言われた言葉に、目を瞬かせる。メガネ
に、魔力??

そんな気もしてたけど、ホントにそんなメガネだったとは。

一応コーラルに礼を言って受け取る。
中学から使っている相棒は、少しくたびれているけれど、それも愛着がある。

「后様はそのようなもの掛けないほうがお美しいと思つのですが……」
コーラルのお世辞を聞き流しながら、メガネをかける。と、世界が一瞬でクリアになった。

『こんにちは』

クリアになった視界に、背後から覗き込むように入って来たひとつの影。

それは、うっすら透けた、美しい少女だった。

第15話 淫魔とメガネ（後書き）

次回、精霊さんの登場です。

第16話 精霊の名付け方

メガネを掛けた瞬間、視界がクリアになった。部屋を覆っていた靄のようなモノが消え、コーラルを薄く包んでいた淡いピンクの光も消えた。

ちゃんと試してみないとわからないけど、私の思った通りならこのメガネには魔力を通さない力があるようだ。

そんなことを考えていたのもつかの間のこと。

『こんにちわ』

と現れた美少女に、心臓が飛び出るかと思った。

「どうかなさいましたか？」

美少女を見つめて固まる私を見て、コーラルが不思議そうに尋ねる。コーラルにはこの少女が見えていないのか？

『このヒトには見えないよ。だって、私、魔族嫌いだもん』
と少女も言っているので見えないらしい。

「あ……と、さっき魔王の話聞いて、ちょっと疲れちゃったから休んでもいい？」

「それは気が利きませんで申し訳ございません。ベッドの準備をいたしますか？」

「そこまではいいや。ちょっと一人で情報を整理したいし」

「では、私は隣の部屋で控えておりますので、御用の際はお声掛けください」

言い置いて、コーラルは隣にある侍女部屋に下がっていった。

どつ言っているものかわからなかったけど、とりあえずコーラルを部屋から出すことが出来た。

さて。

「あなたが、精霊さん？」

ようやく、半透明の空飛ぶ少女に向き合った。

私がコーラルと話す間もふわふわと周りを飛び回るものだから会話を集中するのに苦労したんだ。

『そう、大気の精霊だよ』

やはり、精霊だったらしい。

「はじめまして、じゃないんだよね？　もしかしてずっと、ここにいた？」

『そう。ホタルがこつちに来た時からずっと、傍にいたよ。やっと気づいてくれて、嬉しい』

やはり、聞き覚えのある声だったし、そうじゃないかと思ったんだけど、何度か声を掛けてくれたのは彼女だったのか。

っていうか、ずっとかあ…なんか微妙に恥ずかしい…。精霊にプライベートって通じないのだろうか？

「そういえば、なんで私の名前、知ってるの？」

私の記憶が確かならば、私が名乗る前から私の名前を呼んでいたはずだ。

『精霊には好きな人の名前がわかるの。なんでかはわからないけど、そういうものなの』

「そうなの」

笑顔でそう言い切られると、そういうものなのかと納得せざるを得ない。

「ってか、今は告白と受け取っていいのでしょうか？」

まあ相手女の子だし、半透明だし、そもそも生物と認識していいものかも不明ですけど。

好かれてるのはいいことだけだね。

「まあ一応、私の名前は青山蛭。見守っててくれてありがとう。」

「あなたの名前は？」

「尋ねた途端、なんだか悲しい顔をされてしまった。なぜ？」

『私には名前、ないの。まだご主人様持ったことないから』

「え、ご、ご主人様??」

何やら怪しい単語を聞いてしまった。スルーしてしまいたかったけど、そういうわけにもいくまい…。

『精霊は、主人を持って、その主人のために力を使うの。主人のいない精霊は本来の力を100%出すことはできない。だから、ホタルに声を届けるのが精いっぱいだったの…』

「そうなの…。そのご主人様って、どうやってたなられるの？」

聞いて、しまった、と思った。いや、むしろ嬉しい流れなんだけど、なんていうか、まだ心の準備ができてなかったというか、ご主人様の響きにビビってしまったというか。

けど、目の前の美少女の顔には、みるみる微笑みが広がっていく。手遅れだ。

『簡単です。ホタルが、私に名前を与えてくれるだけで大丈夫』
そう言いながら、期待いっぱいのままざしで見つめてくる。なんていうか、かわいいです。イヌっぱい。ナデナデしてあげたい。

「私で、いいの？」

一応、念のため確認。けっこう重要なことだろうし。

『いいの。むしろ、ホタルがいい!!』

そこまで言い切られるのも逆に不安だ。

「私、こつちに来たばかりなんだけど、私の何がいいの？」

『ホタルの魔力、とてもキレイだから。ずっと、ホタルの傍にいたい』

「…ありがとう」

なにやら照れる。傍にいたいとか、こんな美少女に言われる日が来るとは思わなかった。

魔力がどうかはわからないけど、そこまで私を気に入ってくれるんだし。右も左もわからない状態で、私の力になってくれるのは嬉しいしね。還るまでの間だけど、お願いしよう。

「じゃあ、あなたの名前は……ソラ」

イヌネコに付けるんじゃないから、悩んだけど、大気 of 精霊だつていうし、この子の、元気な、なんだか気持のいいくらいの明るい笑顔のイメージで、青空のソラ。いい名前ではないかと思うのだけど…。

ドキドキしながら彼女、ソラの顔をのぞきこめば、ブツブツと何

かつぶやいていた。

気に入らなかったのだろつかと耳を澄ませば、『ソラ・ソラ…私はソラ…』と何度もつぶやいていた。

「あの……」

『ありがとうございます、ご主人様。ご主人様のために、頑張ります！』

やっぱり違うの名前に…と思った矢先、今までの最上の笑みで決意表明された。

うん、気に入ってくれたみたいで、よかった。

第16話 精霊の名付け方（後書き）

精霊一人、ゲットです

これから先を考えて、ソラの名前を変更しました。青空のソラちゃん
んでお願いします。

第17話 精霊の力

「これからよろしくね、ソラ」

名前を呼んで、挨拶をした途端、ソラの周りに小さな風が起こった。同時に、キレイな光がソラを包む。

やっと、光と風が収まったとき、その場にいたはずのソラがソラでなくなっていた。

『これからよろしくお願いいたします、ご主人様。私でお力になれることがございましたら、何なりとお申し付けください』

にこやかにほほ笑む美女は、ソラに違いないと思う。けど、10歳くらいの美少女に見えていた姿が年頃の美女に変わり、まもっていた透明な光も強くなった。

これが、ソラの100%の力ということだろうか？

けど、さっきまでのあの無邪気と思えるしゃべり方や笑顔、好きだったのになあ…。こんな堅苦しいのは好みじゃない。

「ねえ、ソラ」

『はい。何でございましょうか、ご主人様』

どう頼んだものか、思案する。そもそもなんだよ、ご主人様って。私は姫様でもご主人様でもないし。やっと自分の名前で呼んでくれるヒトが現れて嬉しかったのに。呼びかけで、拒絶されているように悲しい。

「その、ご主人様って呼ぶの、なんとかならない？ さっきまでみたいに、ホタルって呼び捨てで構わないんだけど。あと、しゃべり

方も、さつきみたいに砕けたしゃべり方のほうがいいな」

『しかし、ご主人様は私に名を与えてくださったご主人様でございますから…』

「そのご主人様をお願いしてるの。聞き入れてくれない？」

『でも…』

「いいから！！ これは命令です！！」

だんだんじれてきて、最後はちよつと怒鳴る感じになってしまった。

だって、名付けたとたんにそんな態度ってひどいし。せつかく味方ができたと思つたのに、傍にいてくれるっていつてたソラこんなじゃ、ぜんぜん心休まらないし。

『わかりました。じゃ、ホタル、これからもよろしくね』

仕方ないなって感じで苦笑した後、ニコリ、と笑つたソラの笑顔は美女に変わつても無邪気なもの。これこそソラって感じで嬉しい。

「うん、よろしくね」

「ところで、ソラのほかに精霊っているの？」

呼称の件も落ち着いて、気になることを聞いてみた。今のところ、声を聞いたのも姿を見たのもソラだけだけど、他にもいるのだろうか？ いるなら会ってみたい。

『いるとは思いますが。自然の世界に、精霊は満ちてるから。私は大

気の精霊。他にも、火の精霊、水の精霊、土の精霊、緑の精霊…。
けど、実は私、まだ生まれたばかりで、この城から出たことなく、
他の精霊に会ったことないの。ごめんね』

聞くと、精霊はある日突然、生まれるものらしい。精霊としての
知識や自我を持って。

生まれてからは、主人を探したり、自由にフラフラ遊んでたりは
その精霊によって違うらしいけど、ソラの場合、生まれてすぐに私
の召喚を知って、そのあとはずっと私の傍にいてくれたらしい。そ
の間他の精霊には会わなかったと。

結構簡単に会えるものかと思ったけど、やっぱり難しいのかなあ
…。

「あ、そうそう、精霊の力で、人を遠くに移動させることって可能
？」

他にもいろんなことを尋ねていたら、一番聞きたかったことを思
い出した。コクヨウの言葉を鵜呑みしてたけど、ホントに精霊の力
で元の世界に還れるのだろうか？ これで無理って言われたら、ま
た違う方法考えないといけないし。

『それは、ホタルを元の世界に還せるかどうかっていうこと？』

「え？ あ、そうか、ソラはずっとここにいたんだよね。」

魔王の言ってた通り、精霊の力を借りたら元の世界に還れるかどう
か知りたくて」

『…ホタルは……やっぱり…還り、たいんですね……』

みるみる元気をなくしていくソラ。ここで私とコクヨウの話を一
緒に聞いてたなら、私が帰る条件とかも聞いてたと思う。それで、
私が還りたがってることも知ってると思っただけけど・・・。

「還りたい。私の還る場所は、やっぱりあっちの世界だから」
『そうですか・・・』

とても、悲しそうなソラ。ずっと側にいたいと言ってくれたあの
言葉はホントだったんだな。

そうまで想ってくれて嬉しいけど、苦しい。そんなソラの気持ち
より、私は還ることを思ってしまうから。気持ちを知った上でも、
ソラの、精霊の力を貸して欲しいと思うから。

「ごめんね・・・」

何をどう謝っていいかわからなくて、それだけ一言。

沈黙が部屋を支配する。それを壊したのはソラだった。

『私は、ホタルに還って欲しくない。ずっとずっと、ここに居て欲
しい。
そのためならどんな事だって手助けするけど、還るために力は貸せ
ない』

早口でそう言い切ったソラの目は、とても、傷付いていた。

第18話 魔王の暇つぶし(前書き)

魔王の回想編です

第18話 魔王の暇つぶし

后なんて、必要ないと思っていた。

そう、あの女が来るまでは。

臣下の者たちに進められる形で、嫌々行った召喚。

俺が魔王の座についてもう10年、就任のころには多少混乱していた国も、落ち着きを見えた。そこで、次の議題として上がったのが魔王である俺様の后問題だった。

俺の魔力は強い。それも、今までの魔王に類を見ないほどに。それ故に、俺の后を勤められるモノがこの国にはいなかった。若い頃は、まだ大丈夫だったんだが、歳を重ね、魔王に就任する頃には、俺の相手を出来る女は誰一人居なくなっていた。最後に相手をした女は事後、死に瀕していた。

その女は何とか一命を取り留めたものの、それ以降、女を求めることはしなくなった。もともと、そこまで女を欲していたわけではないので俺様的にはどうでもいいことなのだが。

しかし、臣下たちはそれをどうでもいいとは思わないらしい。国が安定した今、次に求めるは次期魔王の存在らしい。確かに、俺様の魔力が高い分、逆に次の魔王への負担は増える。もし俺様よりずっと魔力が低いものが就任したのなら、間違いなくまた国は荒れるだろう。

そこで求められるのが俺様の子、ということだ。もともとの国は世襲制ではない。だから、俺が子を成す義務はない。けれど、もし俺様の子が出来たならば、より魔力の強い魔王になるだろう。臣

下たちはそれを求めている。

そうは言っても、俺はまだまだ若い。魔力もまだ増えているくらいだし、今後継者を求めるのは時期尚早かと思う。

それでも臣下が后を求めた理由、そして俺様がそれを認めた理由、それは……

暇だったからだ。

国が安定した今、それなりに仕事はあるものの、皆、暇をもてあましていた。

それ故の、後の召喚。

彼女にしてみれば迷惑以外の何者でもないだろうが。

国内に対象となる候補が居ないのならば、別なところから呼び寄せよう。

どうせなら、より魔力の強いものを。

だったら、異世界から……

そんなこんなで呼び出された彼女。

まさか膝の上に降りるとは思わなかったが、その分、新鮮な彼女の反応をすぐ側で見れたのだからよしとしよう。

暇つぶしから始まったことだと告げたら、彼女はどついつ反応をするだろうか？

今まで知るとの女とも違う反応をする彼女。これからどのようなのかはわからないけれど、時間はたくさんある。せいぜい楽しませてもらおう。

そう思う一方で、彼女に告げたように、そんな余裕もないほどに惚れさせてはくれないかと、そんなことを思ってしまうのは、もう彼女、ホタルに少なからず惹かれていく証拠なのかもしれない。

ともかく、しばらく暇だけはしなさそうだと、俺様を罵倒するホタルを思い出しながら思う。

第18話 魔王の暇つぶし（後書き）

暇つぶしで召喚とか、ホタルが聞いたら激怒すること間違いなし。

第19話 精霊と仲直り

召喚2日目、夜。

あのあと、大気の精霊・ソラと気まずい雰囲気のところ、コーラルが帰ってきて、お昼を食べたり、ここでの生活の事なんかを聞いて午後を過ごした。

魔王は朝出て行ったきり、顔を見せもしない。いや、それは別にいいんだけど。

ソラはあのあと一言もしゃべないままに、部屋の片隅で外を見つめている。

コーラルが席を外すたび、何かしゃべりかけようと思うけれど、何と声を掛けていいかわからない。

そうこうしてるうちに、夜になってしまった。

お風呂に入って、夕飯を食べて、後は寝るだけ。

コーラルはとなりの侍女用部屋に下がっていった。

再び、ソラと2人きりになる。

チラリ、とソラを見れば、さっきの悲しそうな表情のまま、佇んでいる。

半透明の美女が、部屋の片隅で涙を流さんばかりにしている様子は、若干恐いものがある……。

そんなことはさておき……

この無垢な可愛い子を傷つけたのは私。
でも、私にも、譲れないものがある。

「ソラ」

呼びかけに振り返ったソラは、今にも泣きそうな顔をしていた。

「ごめんね」

『……………』

「でも、やっぱり私は、元の世界に還りたいと思う。ソラに会えて、嬉しかった。けど、やっぱりここは私の知らない世界で、私のあるべきは向こうの世界だから。」

ソラがそのための手伝いをしたくないなら、無理にお願いはしないよ。でも、還るまでの間でも、ソラと仲良くなれたら、私は嬉しい」

『ホタル……………』

伝えたい気持ちは伝えた。ソラがどうするかは、ソラの自由。

仲良くなりたいのはホントだけど、別れがわかって一緒に居てっ
てお願いするのも、ずるいと思うから……………。

『私も…………私も、ホタルと仲良くなりたい。』

ホタルの願いも叶えてあげられないのに、ホタルは私と、仲良くして
てくれる？』

見上げるようにそう尋ねてきたソラは、抱きしめたいくらいかわ
いい。美少女にこんな顔させたらイチコロだよ……………！！

「もちろんだよ……………！！」

『ゴメンね…………ホタル』

「謝るのはこっち。ソラ、改めて、よろしくね……………！！」

仲直りの抱擁。

ソラは半透明なのに、ちゃんと触れて、あったかい。
あったかさに、安心する。

「仲良くなったものだな」

安心できない声がした。

第19話 精霊と仲直り（後書き）

ソラと仲直り。そしてまたもや魔王様降臨です。

第20話 自由と命

「仲良くなったものだな」

その声に振り返れば、そこにいたのはもちろん、魔王様。いつものごとく、気配なく部屋に入っただけだった。

「ノックくらいしたらどう？ ここにはそんなマナーはないわけ？」

「自分の部屋にノックして入るマナーはないな」

「ここには私もいるってわかってるでしょ！！」

「俺様に敬意を払わないような女に配慮は必要ないな」

「あんたに払う敬意は持ってません！！」

とげを含んだ言葉にも、どうしようもない言葉しか返ってこなくて、ついつい白熱してしまった。

いけないいけない、落ち着かなければ。

気づけば私とコクヨウの間にソラが立って、護ってくれようとしてくれてるし。

こんな可愛い子に守られるなんて、大人として間違ってるわ！！

「何か用？」

「何度も言ってるが、ここは俺様の部屋だ」

落ち着いて問うてみても、思ったとおりの返事しか返ってこない。そういえば、部屋の用意してもらったの忘れてたよ……。まああの「」ラルに頼んでも用意なんてしてくれなさそうだけど……。

「」ここで寝るの？」

「まあ、ここが俺の部屋だからな」

「部屋は余ってるんでしょ？ 他で寝たらどう？」

「なぜ自分の部屋があるのに他で寝なければいけない？」

「じゃあ、私を他の部屋に移してよー！！」

ああ、つい語気が強くなってしまっ。

心配そうに見つめてくるソラが気になって仕方ない。頼りない主人でごめんね…。

「じゃあ聞くが、他の魔族に食べられるのと、俺様の隣で寝るの、どっちがいい？」

「は？」

突然の2択に言葉が出ない。

っていうか、どっちにしても、いろんな意味で食べられそうなんですけど？

「…私の立場って、今どうなってるわけ？」

「俺様と仮の婚姻は済ませたから、一応俺様に次ぐ上位の扱いになるな」

「だったらどうして、他の魔物に食べられるとかって話になるわけ？」

「一応俺様も止めてはいるのだが、あれだけ公の場で俺様を傷つけたからな。一部の魔物からお前は殲滅対象にされている」

「せん…めっ……」

今ほど自分の手の早さを後悔したことはなかった。

あと、自分の不幸っぷりを呪ったことも。

「そういうわけで、ホタルを護るためにはこの部屋で俺様というの

が一番だ」

ちよつと動揺してるところに名前呼んでそんなセリフ止めて欲しい…。こんな奴相手にちよつとキyunとしちゃったじゃないか！！

『ホタル、だまされちゃダメだよ！！』

もともと魔王が悪いんだから、魔王がホタルを護るのが当たり前。それに、魔王の魔力なら他の部屋でだってホタルのこと護れるはずだよ？』

ソラの言葉にハツとした。そうだよ、仮にもこいつは魔王だよ？
ここで一番えらいんだよ？

魔力もものすごい強いつて言ってたわけだから、私みたいな人間一人護ることくらいわけないはずだ。

そう思いながらにらんでやると、奴は悪びれることなくにやりと笑った。

いつも思うけど、この笑い、見下されてるみたいでムカつく。

「うまく精霊を味方につけたみたいだな。

けど、ここでは俺様がルールだ。ホタルの部屋は用意しないし、一人でこの部屋を出ることも認めない」

「なにそれ！！ 私に自由はないわけ？」

「なんと言われようと、この部屋を出ての安全は保障しない。

自由をとるか、命をとるか、好きにしたらいいさ」

「な」

なんたる理不尽さ。無理やり連れてこられたあげく、命まで関わってくるなんて…。

「絶対に還つてやるんだから…」

決意を新たにしたらけれど、還ってきたコクヨウの言葉に現実に取り戻される。

「じゃあそのための手伝いをしようか？　一晩中でも仕込んでやるぜ？」

「いるかバカヤロウ！！」

ホント、早く還りたい……。

第20話 自由と命（後書き）

ホタルと魔王のやりとりは書いてて楽しいです。
ソラの存在は結構忘れられがち…。

第21話 ヘッドォーソフアー

「そういえば、コクヨウはソラのこと見えてるの？」

コクヨウと距離をとりながら、さっきから気になっていたことを聞いてみる。

そういえば昨日も精霊の声がどうのとか言ってた気がするし、ソラのほうを見ながら話してたりするから、姿も見えているのだろうか？

「俺様に不可能はない」

「あ、そう」

なんかこいつの相手疲れてきた。なんでいつもこんなに自信満々なんだろう？

俺様魔王様だから？

「また失礼なことを考えていただろう？」

「別に」

なんでこいつは私がこんだけそっけなくするのにどことなく面白そうなのだろうか？

もしかしてマゾ??

「俺様をそんな目で見るのはホタルくらいのものだぞ？」

「ふーん。どんな目？」

「…もつと崇め奉れ」

「無理」

やばい、魔王が阿呆に思えてきた。または可哀相な子？

「お前と話すのは疲れる。寝るぞ」

「それはこっちのセリフです」

私の可哀相な子を見る目に何を思ったか知らないが、早々に目を逸らされた。

人と話すときは目を見て話すものですか？

っていつか、寝るのか？

魔王の可哀相っぷりに聞き逃してたけど、寝てしまうのですか？
ここで？

昨日はなんか疲れちゃってあのまま寝たけど、このまま毎晩なんて恐ろしすぎる。

コーラルに頼んでなんとか客間を用意してもらおうか思ってたんだけどなあ。すっかり忘れてた上に、さっきの話だと無理っぽいよなあ…。

「私、そのソファで寝てもいい？」

「かまわないが、朝そこで寝ているお前も見て、コーラルはどう言うだろうな」

「コーラル？」

「コーラルは俺様の後の世話が出来ると思って喜んでいたからな。そんな后が俺様と共にベッドで寝るのではなく、ソファで寝ていたら…」

言われて、私を“后様”と呼ぶコーラルを思い出す。

淫魔だと言っていた彼女。

后様の精を奪うのは禁止されているからと言っていた。けど、私が后ではなかったら？ 魔王と共になるのを拒否することとは后でないと宣言すること？

「私、コーラルに食べられちゃう？」

淫魔がどうやって精を取るのかはわからないけれど、吸血鬼のように首筋を噛まれる様が脳裏に浮かんだ。血だつて出血しすぎたら死んでしまう。精つてやつも、奪われすぎたら死に至る、気がする。そんなことを思いながらコクヨウに聞いたのに、奴はニヤニヤ笑うだけで否定もしなければ肯定もしない。なんて性格が悪いんだ！！

「俺様だつて相手は選ぶ。」

ホタルが俺を拒絶しているうちは、お前に手は出さない。

まあ、少しでも俺に心を許す気があるのならば、今すぐにでも抱いてやるぞ？」

「な、許すわけないでしょ！！！」

「じゃ、一緒のベッドで寝ても何の問題もあるまい？」

「う…うん…？」

なんか納得してないままの返事を了解と取ったのか、魔王は一人でさっさとベッドに入ってしまった。

ぼつんと一人残された私。

あれ、この展開って???

うまいこと流された???

そして今夜も魔王様の隣に。

こんなんでホントに私、還れるのかなあ…。

第22話 二つの月

何事もなく、夜は更けた。

はい、深夜です。

寝れません。

私だって、そこまで神経図太くないんだよ。

昨日はなんかいろいろあってすぐ寝ちゃって、さらに朝までしっかり熟睡でしたけども。

…だからって、そう毎晩、こんな昨日今日会ったばかりの男の隣で寝れるほど、肝の据わった女じゃないのですよ!!

なんて力説したところで、魔王様はスヤスヤお休みのご様子。ソラも夜は寝るのか、メガネを外したせいで見えなくなっているだけなのか、声も聞こえず静かな夜。

そつと天蓋を開けてみれば、部屋のカーテンの隙間から光が見えた。

うつすらと室内を照らす、淡い、青白い光。

「月……?」

知らず、声に出していた。

けれど、振り返ってみても、コクヨウは変わらず眠っていてホッとする。

そつと起き上がり、天蓋の外へ。

ふかふかの絨毯は、足音もかき消してくれる。

たどり着いた窓の外には、大きさを違う2つの月が浮かんでいた。

「月も、2つあるのか…」

そのままぼんやりと月を眺める。

二つの月が輝く外は、元の世界よりも明るい。さらに、月を中心にキラキラと金色の輝きが舞っている。月にも魔力があるのだろうか？

念のため、枕元に置いていたメガネをかけて見てみれば、金の輝きは見えなくなった。

やっぱりここは、知らない世界。

再びメガネを外し、空を見る。

黒い闇に浮かぶ、金の月。そして、星々の輝きと魔力の煌き。

「キレイ…」

知らない世界、だけど、その光景はとて、キレイに見えた。神秘的で、幻想的。この世のものじゃ、ないみたい。

ふと、窓枠に置いた手に雫を感じた。

知らず、涙がこぼれていたみたい。

この夜空以外にも、キレイな光景はいっぱいあるんだろう。

けど、それ以上に、この世界が怖い。

知らない世界が、怖い。

誰も頼る人のないこの世界が、怖い。

また雫を感じて目をやれば、涙に濡れる手の中で、愛用のメガネが淡く光っていた。

第22話 二つの月（後書き）

今回短め。次回に続く。

第23話 蜜月の魔力

光るメガネに、しばし目を奪われる。

確かに見えていたはずの魔力が見えなくなったり、精霊が見えるようになったり、変わったメガネだとは思ってたけれど、魔力が宿っていたとは。そういえばコーラルがそんなことを言ってたような気がする。

淡い金色の光に包まれたこれは、優しい人がくれた、大事なメガネ。

中学の頃から掛けている戦友だ。

魔力があるとわかってても、不思議と納得している自分がいる。

むしろ、だから今までこうして私と共に過ごしていたんだと思える。

私の、味方。頼れる相棒。

これからも、よろしくね。

「お前でも月の光の元で見るとそれなりに見えるな」

大事なメガネを握り締めて挨拶を交わしていたら、後ろから失礼な言葉が聞こえてきた。

振り返るまでもない。コクヨウだ。

「それなりで悪かったわね。そう思うならさっさと元の世界に還しなさいよ」

「お前がそれなりでも、俺様の子供なら美形に違いないぞ？」

「だからあんたの子供なんて産む気ないって言ってるでしょう？」

「その気になれば最上の快楽を教えてやれるのに…」

「け、結構です!!!」

「強情だなあ」

一気にさつきまでの湿っぽさが吹き飛んだ。

この人相手だとどうも調子が狂う。

「寝れないなら俺様が腕枕でもしてやるぞ？」

「そっちのほうで寝れないっての!!!」

何なんだこいつは。

なんでこんな夜中にこんな元気なんだ。…って、一緒になってやり合ってる私も同じか。

「蜜月みつつきか…」

いつの間にか隣にいたコクヨウが月を見てつぶやく。

「蜜月って、満月のこと？」

「二つの月が共に満月になることだ」

「珍しいの？」

「年に1度か2度、多いときは毎晩のように蜜月になる晩もあれば、何年もならないこともある」

「何それ？ 月って周期的に満ちたり欠けたりするものじゃないの？」

「お前の世界ではそうなのだろうが、ここでは違う。月の魔力次第、月の気分次第だ」

「変なの」

「ここは、そういう世界だ。お前は ホタルはそんなにここが嫌か？」

「……っ」

急にまじめな声で名前を呼んでそう言われて、なぜだか言葉に詰まった。

それは、さっきまでキレイな夜空に感動してたからかもしれないし、コクヨウが思いがけないほど優しい手つきで頬に残っていた涙をぬぐってくれたからかもしれない。

「私は」

「俺は、ホタルに還って欲しくはない」

私の言葉をさえぎっての、何度目かになる告白。

けどそれは、今までとは違った風に聞こえて、思わずコクヨウを見上げた。

コクヨウはすぐ側にいて、キレイな金色の、蜜月の瞳で私を見下ろしていた。

コクヨウの瞳は、キレイで、ものすごくキレイで、釘付けになった。

じつとじつと見つめていたら、どんどん瞳は近づいてきて……。

唇を感じる、コクヨウの体温。

ああ、魔王も唇は柔らかいんだなあ……。

……。

いやいやいや……！

しっかりしろ……！ 私……！

しっかり密着してしまっていたコクヨウを思い切り突き飛ばして、
深呼吸。

吸って、吐いて。吸って、吐いて。

落ち着け、落ち着け。

なんて事をしてるんだ、私は。

私をこんなところに連れてきた元凶、天敵、害虫な俺様魔王に対してなんてことを。

少し落ち着いてコクヨウを見れば、頬を押さえて呆然としていた。
あ、突き飛ばしたつもりがグーパンチが入ってたっばい。赤く腫
れて痛そうだ。

まあでも正当防衛だし。私は悪くない！

「フフフフツ…」

自己完結してたら、コクヨウが急に笑い出した。
怖い。どこか変なところぶつけたか？

「だ、大丈夫??」

「やっぱりお前は面白いな」

これ以上俺様っぷりが悪化したら大変だと心配してあげたのに、
また何やら馬鹿にされました。

「な、なにさ!?!」

「いいからもうさっさと寝ろ」

文句を言い返してやるうとしたら、はいはいって感じで頭を叩かれた。

なにその扱い!!

けどまあ、さっきまでの変な空気はなくなってほっとする。

「蜜月は人を酔わせる」

「へ？」

「蜜月の光は魔力を帯びている。浴びすぎは危険だぞ？」

「な……」

じゃあさっきのあれは、月の光のせいってこと??
なんて事だ。恐るべき世界……。

「じゃ、じゃあさっきのは無効だからね!!

私は忘れるからコクヨウもさっさと忘れること!!」

言うだけ言って一人でベッドに戻る。

これ以上光を浴びてなるものか!!

後ろから『フッ』てコクヨウの忍び笑いが聞こえたけど、そんなのは気にしない。

酔っ払いのすることはそのまま水に流すに限るのさ!!

しばらくして、ベッドの反対側にコクヨウが入る気配がした。

「ホタルを還したくない気持ちは、本当だ」

そう囁いて、ベッドの端に移動する。

きつとまだ、蜜月に酔っているんだ。でないと、あのコクヨウがこんなに甘く囁くはずがない。

でないとこんなに、私の心がざわつくはずがない。

忘れよう。

さっきコクヨウに言った言葉をかみ締めて。

でも、さっきまで感じていたコクヨウのぬくもりと、唇の感触が消えなくて。

夜は、さらに更ける。

第23話 蜜月の魔力（後書き）

2人の仲にちよつと進展!?

今後の展開と魔王様の発言を考えて、R15指定にしました。
実際そつという描写をするかどうかは未定ですが、念のため。

第24話 魔王様の寝顔は…

目が覚めたら朝だった。

スッキリ目が覚めたけど、あたりはまだ薄明るいくらい。
どうやら寝てからそんなに経ってないようだ。

そつと隣を見やれば、思いのほか近くにコクヨウの寝顔があった。
思わず、ドキリとする。

2度目に見る寝顔。

けど、寝入ってから見る寝顔と、朝見る寝顔はなんか質が違う気がする。

昨日は私が起きた頃にはコクヨウは起きてたし。

朝の寝顔は、なんていうか、…いやらしい。

寝乱れた髪だとか、ちょっと肌蹴た服だとか、寝苦しそうに歪んだ眉だとか…。

寝息もなんか、セクシー。ってか、いやらしい。

なんだよ、こいつの色気は。色情狂めっ！（ちょっとちがう？）
色っぽいのに額にかかった髪が幼く見えて可愛いなんて…いやらしいっ。犯罪だよ！！

ってか、なんでこいつこんな近くで寝てるのさ。

と…見やれば、視界の端に捉えたありえない光景。

…手が、私の手が、魔王様の服の袖をつかんでいた。

「うおおっ…」

あまりの事態に、変な声が出た。

何してんだ、私…。すっかりしろよお…。

うつろたえながら、そつと、そおつと握り締めていた手を緩めていく。
寝てる間に何やってんだよ私。寝相悪いにしてもベッドから落ちるほづがなんぼかマシだよ。

ああ、これも全部、蜜月のせいだよ、そつだよそつに違いない…。
ぶつぶつ口の中で言い訳をしながらやっとな手を離れた。
そのままそつと、そつと、体を離していこうとしたら…

「うあつなっ…」

逆に、手をつかまれた。

いきなりのことにまた変な声が出た。

「ちょ、待っ…」

そのまま、手を引かれて引き寄せられる。
行き着いたのは魔王様の胸の中。

そのぬくもりに思い出すのはもちろん、昨夜のこと。

…もちろん昨日のキスの事は覚えてる。ってか、忘れられるわけないし。

「なんで逃げるんだ？ …昨日はあんなに積極的だったのに…」

腕の中から逃げようともかく私の耳元で囁かれた低い声。ジーンと体の奥にしみるような、なんというか、すんごい、エロい声。ホント勘弁して欲しい。

「何の話か私にはさっぱりなんですけど…！」

確かに私の手がコクヨウの服を握ってたのは事実みただけど、それ以上のことがあるはずないし！！ …… たぶん……。

いやいや、自分で自分を信じてやらなくてどうするー！！

蜜月のせいであつと人肌が恋しかつただけで、ぬくもりを感じれたらそれで充分のはずー！！

実際、着衣にも乱れはないしね！

…あ、いや、コクヨウの寝着がちょっと乱れているけれど、それはコクヨウの寝相が悪いせいであつて、私は関係ない…はず。

「ほう…覚えてないのか」

「な、な、何を？」

やばい。ホントに自信がなくなってきたですよ。

私、何したのさ…??

「……………」

「な、なによおー！！」

人の顔見て黙り込むとかマジで止めて欲しい。
ますます不安になるじゃないか。

「覚えてないのならいい」

「え、ちょっと、よくないってー！！」

そう言つて、ベッドから降りていくコクヨウ。

いやいや、言つて貰わないと余計に気になるしー！！

「とりあえず、顔でも洗つてきたらどうだ？ よだれがついてるぞ」

「え、うそっー！！」

って、私そんな子供じゃないし！！　よだねなんてついてません
！！
くそう、まんまと逃げられた…。

コクヨウを追ってベッドから出たけれど、部屋の中にはもうコク
ヨウの姿はなかった。

代わりにいたのはタオルと着替えを持ったコーラル。

「さ、お召し替えをいたしましょう」

満面の笑みのコーラルを無視するわけにもいかず、顔を洗いに移
動する。

でもでも、後で絶対にコクヨウを問い詰めてやるんだから！！

第24話 魔王様の寝顔は…（後書き）

最近更新が滞りがちで申し訳ありません。

しかも毎回短いし…。

24話でまだ召喚3日目という遅さ。頑張らないと…。

第25話 侍女と精霊

着替えを手伝ってもらっている間も、コーラルはえらくご機嫌だった。

ニコニコニコニコ。

笑っばかりで何も言わない。むしろ、恐い。

「え〜っと、何かいいことあったの？」

「もちろんですわ！！」

聞きたくないけど、聞かないとこの無言のニコニコ攻撃は終わらないと思って聞いてみた。

待ってましたとばかりにしゃべりだしたコーラルに、やっぱり聞くじゃなかったとすぐさま後悔したけれど、もちろんもう遅い。

「魔王様と后様が2晩連続で同じ寝所でお休みになったんですよ！　しかも、朝から魔王様はご機嫌な様子でしたし、后様からは魔王様の魔力をまとつてらっしゃるし……。まだ本番まではいかれてないご様子ですけど、この分では時間の問題ですわよね！！　お2人は心身ともに結ばれ、真の夫婦に……。すぐ御子も授かるかもしれないませんわね！！　お2人の御子ですもの、さぞかし魔力の強い、美しい御子に違いありません！！　……。ああ、早く婚儀の準備を進めなくてははいけませんわ！！」

「な……」

なんていうか、開いた口が塞がらない。なんだこの人。みたいな目で見てしまう。

2晩寝ただけでもう子供とか……どんだけ展開速いんだよ。まあもともと后として召喚されたからそういう期待大きいんだろうケドさ。

っていつか、私、魔王の、コクヨウの魔力まってるわけ??
確かに昨日キスはしたけど、そのせい?

そう思っでよくよく見れば、自分の体を覆うようにうっすらと、
コクヨウと同じ黒い靄が見える。

なんか、魔王の菌が移ったみたいで気持ち悪い。
どうやったらとれるんだろうか?

『ホタルうゝゝ!!!』

黒い気をまとってしまった自分の体をどうしたものかを見てい
たら、どこからともなく声が出た。

この声は、ソラだ。

外したままだったメガネを掛けて見たら、なにやら憤慨した様子
のソラが入り口から入ってくるころだった。

「おはよう、ソラ。何かあったの?」

『何かじゃないよ!! 昨日の夜から私、ここの部屋閉め出されて
たんだよ!!!』

「え?」

美少女は怒っでいても可愛い、とか関係ないことを考えてたけど、
そんな私にはかまわず、ソラはぶりぶりしながら昨日の様子を語っ
てくれた。

いわく、昨日ベッドでコクヨウと2人で寝ることについて話し合
って(怒鳴りあって?)いる最中、なんとか私の役に立とうと奮闘

していたはずなのに、気づけば部屋の外に出されていたらしい。
その後どう頑張っても中には入れず、廊下でうろろろしていたんだとか。

そういえばあの話の途中からソラの声を聞かなかった。言い合いに夢中で気が付かなかったけど…。今朝まで姿も見ないから寝てるものと思ってたんだけど。

「ごめん」

『ホタルは何にも悪くないんだよ！！ 魔王が結界を張って、私を追い出したんだよ。』

私、ホタルが魔王に食べられちゃうかと思って心配で心配で…』

ソラの不在にも気遣いまま、むしろ精霊も寝るのかなあとかのんきなことを考えていた自分が申し訳ない。ご主人様失格だ。でも、ソラの怒りの矛先は魔王のみにあるようだ。

ついでに、昨夜からの怒りと心配の反動が、ひとしきりしゃべった後、しがみつかれて泣かれた。

美少女は泣き顔も可愛いけれど、自分のことで泣かれるのはどうも落ち着かない。

「后様は精霊が見えるのですか？」

泣き止まないソラをどうしたものかと思っていたら、第三者から声がかかった。

そういえばコーラルもいるんだった。

「あ、そう。大気の精霊のソラ。コーラルも見えるの？」

「いえ。なんとなく気配を感じることは出来ませんが、姿は見えませんし、声を聞くこともできません。」

ああそういえばそうだった。精霊は基本、魔族には見えないんだ。なんでかコクヨウには見えるみたいだけど。まああの俺様魔王様には不可能はないらしいしね。

「このあたりにいるのですか？」
「うん、そう。私にしがみついている」

見えない空間を見つめるコーラル。その目はものすごく、真剣だ。そのにいるはずのソラの姿を探して、目を凝らす。だけれど、ソラが見せようとしていない以上、コーラルにはソラの姿は見えない。しばらくして残念そうに私に視線を戻してきた。

「さすがお后様ですわね。精霊の姿が見え、会話まで出来るだなんて…うらやましいです…」

なおも残念そうに、ソラがいる空間を見つめるコーラル。その目はとても、哀愁を帯びている。

泣いていたソラも、その視線を感じてか、私から顔を上げた。

「コーラルは精霊を、悪くは思っていないの？」

「もちろんですわ！　中には自然の力を借りて駆使する精霊を、魔力を持たないモノとして下等とみなす魔物もありますけれど、私はそうは思いません。私たちには扱えない自然の力を使える聖なるモノ、そう思っております」

魔物はみんな、精霊を嫌ってるものかと思っていたけれど、そうでもないらしい。

「私の生まれた場所が人間界に近かったせいもあって、小さい頃は精霊もたまに姿を見せてくれたのです。…それはそれは、光をまとった美しいモノ達でございました…」

うつとりとその姿を思い浮かべるコーラル。…なんだかその笑顔がエロい。さすが淫魔。

横を見ると、ソラもどうしていいかわからない様子でそんなコーラルを見つめている。

「姿、見せてあげたら？」

その様子に、魔族への嫌悪感みたいなものは感じられなかったので、ソラにだけ聞こえる音量で言ってみた。第一、3人でのに1人だけ仲間はずれにしてるみたいでなんか居心地が悪いし。

『はい』

「ああ！！ 精霊！！ 本物ですね！！」

返事と共にコーラルにも姿が見えるようにしたらしいソラを見つめて、コーラルが歓喜の悲鳴を上げた。キラキラした瞳でソラを見つめる。

対するソラは、困惑気味だ。

嫌っていた魔族からの羨望のまなざしに、どうしていいかわからないのだろう。

「わたくし、この度后様の侍女を魔王様より仰せつかりましたコーラルと申します。ソラ様、これから共に后様のお側でお仕え致しますよう…！」

『あ、はい…』

なんだか温度差がすさまじいけれども、2人の顔あわせは無事に終了したようだ。

「ま、何はともあれ、2人とも、よろしくね」
「『はい』」

声を揃える2人を見て、姉妹がいたならこんな風かななんて、関係のないことを思っていた。

第25話 侍女と精霊（後書き）

なんか区切りが悪くて、いつもより長め。
コーラルとソラ、仲良くなれるといいなあ。

第26話 白馬の王子様!?

淫魔であるコーラルと、大気の精霊・ソラ。そしてただのOLである私。

異種間交流的な会話で、午前いっぱいを過ごした。ガールズトークをするにはまだお互い情報が足りなかった(むしろ、コーラルからソラへの一方的な質問攻めだった)けど、この世界の情報は増えた。しかも、違う視点からの情報を得られるようになったのは嬉しいことだ。

あと、もうメガネなしでもソラを見ることは可能だそうだ。ソラと契約し、私が主人になってるので、よっぽどのがない限り(ソラの力が弱まるとか、自主的に見えないようにするとか)ソラを見、会話できるらしい。

まあ、メガネなしだとこの城の中ではいろんな色の魔力が充満してて気持ち悪いから、メガネはかけてるつもりだけど。

ホント、不思議なメガネ。

…大事な大事な、私の相棒。

お昼も食べて、コーラルは他の仕事があるとかで部屋から出て行った。

残ったのは私とソラ。

暇です。

聞きたいことは大体聞いちゃったし、かといって、この部屋の中で他にすることが思い浮かばない。

外はこんないい天気なのに、こんな部屋の中に閉じ込められるなんて、もったいない。

何にもしなくていいなんて、仕事に追われてた日々を考えると）
って言ってもほんの3日前までのことなんだけど（すごく贅沢なことなんだけど、かといってホントに何もすることがないってのもものすごい苦痛だ。暇ってツライ。

で、どうするか？

ものは試しで、外に続くはずのドアへ。

部屋の外には出るなとコクヨウからも言われてるけど、暇なものは暇なんだ。実際、危険な目にあっただけでもないし。

暇な私は強気です。

肝心のドアはというと…開きません。

仕方がないので中からノックしてみる。

「すみませ〜ん。外に出たいんですけど〜」

ソラの話では、このドアの外には常に衛兵さんらしき人が立っているらしい。

昨日の夜は一晩中その衛兵さんに暴言を吐き続けていたそうだと、
もちろん、彼には届かない声で。

もちろん、私の声は誰にだって聞こえる。扉一枚くらい通す大声
を出したし。

なのに……返事がない。

「もしもし、聞こえてますかあ〜??」

ザ・無言。返事がないって切ないね。大きな独り言言ってるみたいで恥ずかしいし。

その後もいろいろな声を掛けてみたけれど、どれも無反応。
しょうがない。コーラルが戻ってくるまで待つかあと考えてドア
に背を向けたら、カチャリと開く音がした。

コーラルが戻ってきたのかと振り返った先にいたのは、見知らぬ
青年だった。

(王子様!!)

声に出さなかった自分を褒めてやりたい。

青年は、まさしくこれが白馬の王子様と言うべき美形だった。

金髪に碧眼、長身、人のよさそうな微笑み……完璧すぎて気持ち悪い
いくらいの、絵本の中の王子様。

「后様にはお初にお目にかかります。魔王様の側近でアウインと申します。どうぞ、お見知りおきを」

名乗りながら、自然な流れで手の甲にキスされた！！

何これ何これ！！　こんなおされたの初めてだよ。　さすが王子

(いや、魔王の側近って言ってたけども)手馴れてる！！

「蛭といます。こちらこそよろしく…」

自分でも顔が赤くなってるのがわかる。

アウインは、私が夢見た白馬の王子様そのままの容姿なんだ。

コクヨウもイケメンではあるけど、アウインはコクヨウとはまた違うイケメンだ。コクヨウは野性味あふれる感じの男らしい雰囲気だけど、アウインはまさに西洋の王子様。見る人を惹きつけて止まない、そんなオーラが出る気がする…まあ魔族だから、ホントにそんな種なのかもしれないけど。

それ以上言葉の出ない私に、アウインは優しく微笑みかける。

「后様が退屈なさっているとのことでしたので、魔王様の命で城内の案内をさせていただきますことになりました。私が相手ではお気が進まないかもしれませんが、よろしいですか？」

「いえ、そんな…よろしいです…」

ああ、緊張しすぎて言葉がおかしい。喜んで一緒に行きますって言いたかったのに。

…あの笑顔は反則だよ…。

第26話 白馬の王子様！？（後書き）

次話、城内見学。

アウイン 青色の宝石の名前。ようやく登場人物増えました。

第27話 魔王様の側近

「本当に俺が相手でいいのか？」

魔王城の一角で、アウインが魔王に問いかける。

魔王とその側近という間柄でありながら、2人しかいないときは少し砕けた話し方になる。魔族第1位である魔王と、第2位のアウイン。もちろんその魔力の差に大きな開きがあるものの、一番近いものとして、陰日なたからサポートしてきた。長い年月、戦いの日々も退屈な日々も、共に過ごしてきた主従でありながら友人のようない間柄だ。

そんな2人が話す内容はもちろん、2日前に召喚した娘のことだ。最近の話題はこれしかないと言ってもいい。

ついさつき、娘の部屋の警備をしていた者から、彼女が部屋を出たがっていると連絡が入った。

ここに来て2日。あの部屋にいただけでは暇なのだろう。

だが、まだ今のこの城は彼女にとって安全とは言い切れない。出たいといって、はいそうですかと出してやるわけにもいかない。

陛下もそう伝えているであろうに、まったく、危機感がない。

まあ平和な世界から来たようだし、暇をもてあましているようだから、仕方ないのかもしれないが。

で、冒頭のセリフになる。

「俺より、陛下が行くべきなのでは？ もっと一緒にいればいいじゃないか」

彼女に城を案内してやって欲しいという陛下に、疑問を感じるのは俺だけではないはずだ。

彼女がきて2日。陛下の機嫌はすこぶるいい。

こんなに機嫌がいいのは数十年ぶりではないだろうか？

あの時は確か、未開の地へ遠征（という名の暇つぶし）に出掛け、世にも珍しいピンク色のトラを捕獲してきた。珍種というより神種と言っていいそのトラを手なずけたと、2階建ての一戸建てほどの大きさのトラの背に乗って、子供のように笑って帰ってきた陛下を思い出す。

まあ、そのことよりも、その日の夕餉にトラの丸焼きが出されて肝をつぶした記憶のほうが鮮明に残っているが。

：ちなみに、夕餉のトラは珍種のピンクのトラではなく、普通のトラだったらしいが。どちらにしる、魔族とはいえ、飼い始めたばかりのペットと同種を食べる魔王の気が知れない。

ピンクのトラは、今でも魔王城の一角で大切に飼われている。

あれ以来となる機嫌のよさ。今朝も、鼻歌でも歌う勢いで執務室に入ってきた。気味悪く思いつつ問えば、返ってくるのはあの娘の話。陛下が纏う魔力もやわらかい。

機嫌の悪いときは俺ですら近くにいて命の危機を感じることもあるのだから、嬉しいことだ。

そうまで気に入っている娘ならば、もっと側にいればいいと思うのが自然な流れというものだろう。

今だって、執務室とはいえ、特に仕事もなく優雅に茶を飲んでるだけなのだから。

「いや、あまり長く居たんでは逆につまらないからな。じっくり少しずつ、じわじわと落としていくほうが面白いだろう？　…時間はたっぷりあるのだし」

魔王にかかれば后探しも暇つぶしのゲームの一環だ。少し、未来の後に同情した。ま、そういう自分も楽しんでいる一人に違いないのであまり陛下ばかりを悪くは言えないけれど。

「まあそういうことなら俺が行って来ます。けど、もしあの娘が俺に惚れてしまっても知りませんからね」

少しでも陛下を焦らせてやろうと思ったけれど、そんな俺のセリフにも、陛下はにやりと微笑んただけだった。

「それならそれで、再び俺様に惚れ直させてやるまでさ」

どこまでも自信満々なのが陛下らしい。けど、他の男に惚れても尚、惚れ直させたいと思うくらい惹かれてるのだと、陛下は気づいているのだろうか。

魔王様の恋の動向はどうなるのか…。
しばらく、暇だけはしなさそうだ。

第27話 魔王様の側近（後書き）

前回のあとがきを裏切って、まさかのアウイン視点。

次話はちゃんとホタルとアウインの回になってますのでスイマセン。

第28話 魔王城散策

白馬の王子様、もとい、魔王の側近アウインに連れられて、城の中を歩く。

中世のヨーロッパ的なお城の中は、掃除も行き届いていてキレイ。窓からはサンサンと日も差し込んで、明るく城内を照らしている。ここが魔族の城だなんて言われないとわからない。行ったことはないけれど、ベルサイユ宮殿とか、ノイシュバンシュタイン城とか、そんな貴族のお城な感じ。

壁にかかる絵画だとか、キラキラ光るシャンデリア、床は大理石ですか？ 調度も豪華でキレイ！

ウキウキしながら一人できよろきよろしていたら、隣から忍び笑いが聞こえた。

見れば、アウインが笑っている。 ……笑顔もステキ。

「ホントに、かわいらしい方でございますね」

その言葉に馬鹿にしてる感じは含まれてなくて、だからこそ余計に恥ずかしくなる。

私ってば、28にもなってなんて子供っぽい行動を…。

頬を赤らめる私をどう思ったのか、アウインは私に手を差し出した。

条件反射のようにその手を取る。 ……取ってから思った。この展開、ちよっと前にもあったー！！

数十分前と同じように、優雅に私の手の甲に唇を付けるアウイン。とたん、さっきまでの比じゃないくらい、私の顔が赤くなったのがわかった。マジで、止めて欲しい…。

慣れない展開にあわあわしっぱなしの私を余所に、アウインは余裕の微笑み。…その微笑すらかっこいいと思つて見惚れてしまう私つて…。

口付けを終えても、アウインは私の手を離そうとはしない。

「あの…えっと…」

もじもじと握られた手とアウインを見つめる私は、冷静な部分の自分から見ればひどく滑稽だ。何もじもじしてるんだよ！と自分に突っ込みたくなる。私つてこんなにミィハーだったんだらうか？

「このたびは魔王陛下直々に后様のエスコートを任されております。どこへなりと、后様のご希望の場所にご案内させていただきますよ」

そう言いながら、私の手を引いて歩いていこうとする。

「あ、いや、手を繋いでもらわなくても大丈夫ですよ？」

度重なる展開に、頭は許容量いっぱいだ。ついていけない。

アウインの背は私より頭ひとつ分高くて、見上げないとその表情を窺うことは出来ない。手を引かれながらその顔を見上げて、一歩先をいくアウインの表情はわからなかった。

先ほどのセリフも聞こえているだろうに、繋いだ手が緩まる気配はない。

まあ、手を繋ぐくらいどうって事はないんだらうケド、この数年そんな色恋沙汰からは遠ざかっていた私には重い。それに、何より相手が王子様だ。アウインの手は大きな男の人の手で、私より少し冷たい。なのに、私の手は汗ばんできそうだ。ホント真剣に、離して欲しい。

そんな私の乙女心をよそに、アウインの歩調も緩まらない。さつきは私の好きなどころにつれてつてくれるとか言っていたのに、私の意見を聞く気はなさそうだ。

ま、こつちに来たばっかでどこに行きたいもないんだけど。

それから手を繋がれたまま、2人で歩いた。ここは図書室、こつちは食堂と、案内をしてもらいながら。その間も、段差があるたびに気を使ってくれるアウイン。なんかものすごい、深窓の令嬢にでもなった気分。

あつという間にも感じた城内ツアーの先は、中庭のようだった。

「ぜひここに、貴方をお連れしたかったです。ここは魔王城で一番美しい場所ですから」

中庭と呼ぶには広すぎるその空間。でも、ぐるりと四角く回廊に囲まれたそこは、やはり中庭だろう。真ん中には大きな噴水、そしてその周りに一面に咲き乱れる花々。緑の木々も瑞々しい。

そこは、夢のように美しい空間だった。

中庭の入り口に立って、中庭の景色に見とれていた。繋いだままのアイウンの手も気にならなくらいに。

ふと見れば、噴水の上に何かいる。よくよく見れば、それは噴水の上に浮かぶ半透明のヒト。

噴水の上と、その隣の花畑の上にも一人。2人の精霊さんが浮かんでいる。

美しい景色の中で戯れる美しい妖精。それはそれは素晴らしい光

景で、しばらく魅入ってしまった。

そうして見つめていたら、どうやら向こうがこちらに気づいたようだ。にこやかに笑って、手を振ってくれる。嬉しくなって、駆けていこうとした。…アウインの存在を完全に忘れて。

手が、離れそうになった、その時、何かが、起きた。

慌てたような顔の精霊さん。

回る視界。

回廊の中のガラス窓に、ソラの悔しそうな顔が見えた。…そういえばしばらく姿を見なかった。また、締め出されたの？

ソラへの心配もそこに、視界が動く。

体を感じた衝撃、そして、頬に感じるぬくもり。

顔を上げればすぐそこに、アウインの整った顔があった。

『…ホタル…!!』

遠く、精霊さんの声が聞こえた。

第28話 魔王城散策（後書き）

なんか中途半端なところで終わってしまっ
てスイマセン。
次回投稿急ぎます！

第29話 紅の瞳

…現状を、把握しましょう。

午後、暇で暇で、少しごねてみたら白馬の王子様が現れた。

王子様は王子ではなくて、魔王の側近だった。

彼に案内されて中庭に来た。

中庭はすごくキレイで、噴水の上に精霊さんがいて、手を振ってくれた。

嬉しくなってそっちに行こうとしたら…視界が回って、目の前にアウインの顔があった。

どうやら私はアウインの腕の中にいるようだ。

背中に回された腕、密着した体、吐息まで感じられるほど近い顔。少し背伸びすればキスだって出来るくらいの、そんな距離…。

「…って、ちよつと…！」

思わずキスしそうになったよ！！ 恐るべきイケメンパワー！！
思いとどまった自分を褒めてやりたい。
慌てて、離れようとする私。

なのに。

視界がまた、反転した。

「きゃあっ」

強い力で体が倒される。

衝撃で、メガネが飛んだ。

地面にぶつけたお尻が痛い。

上からの圧迫が、苦しい。

息が…と試ってみれば、私の頭を抱きこむようにかぶさるヒト…
アウインだ。

どういうこと？ 私、アウインに押し倒された？

何ていうか、嬉しい、とか思ってしまう自分にちよつと呆れながら、どいての合図としてアウインをペチペチ叩いてみる。

そろそろ本気で息がヤバイ。

私の合図に気づいたのか、アウインが顔を上げる。

拘束の解けた私の目が見たのは、頭のすぐ上の地面に刺さった矢と、上に押し掛かるアウインの紅い瞳だった。

…ええっと、え、どういうこと？

シュツという音とともに、矢が放たれる。

今度は少し軌道を逸れて、3メートルほど先にある木に刺さる。

よく見れば、始めに私がいた辺りにも1本の矢。3本とも青黒い魔力を帯びている。

もしかしなくても私、狙われている？？

あまりに急なことに、無意識に側にいるヒトに縋る。つまり、アウインに。

押し倒したような体勢のまま、下から袖を握り締められたアウインは、一瞬にやりと笑った気がした。さっきまでの王子様の微笑とは違う、少し皮肉っぽい笑み。

けどそれも一瞬のことで、笑みを消したアウインは、紅い瞳のまま、矢が放たれた方向を見た。

…視線だけで人でも殺せそうな、物騒な視線だ。紅い瞳が、怪しく輝く。

そのアウインの視線の先に意識をやれば、回廊の死角に魔力の気配。矢と同じ、青黒い魔力。けれどその魔力は、次の瞬間プツリと消えた。花火を水につけた時みたいに、シュって。始めからなかったみたいに。

恐いものを見た。そして、その恐ろしいことをしたのは…

「アウイン…？」

恐る恐る、私の上に押し掛かったままの紅い瞳のヒトを見上げる。握り締めた服の袖はまだ私の手の中だ。

会ったときの王子様なアウインと、目の前の残忍な目をしたアウイン、どっちを信じたらいいかわからなくて。…信じるも何も、つい1時間くらい前にあっただばかりなのに。

どうしていいか、自分でもわからなくて、動けないでいる私に、アウインが微笑んだ。

その微笑みは、今までの王子様とも違う、にやりと笑ったあの笑顔とも違う。人を惹き付ける、魔性の微笑み。これは、この笑顔は見てはイケナイ。

本能が命じるままに、目を閉じる。見続ければ石になる、そんな気がして。

目を閉じた私の唇に感じるぬくもり。

え、と思って目を開いたら、もうそこにアウインの姿はなかった。起き上がったアウインは、飛んでしまっていた私のメガネを拾い、

掛けてくれる。

手を引かれて起き上がってみれば、そこにいたのは元の金髪碧眼の王子様だ。

さわやかに微笑みかけられて、あれ、今までののは錯覚?とか思っ
てしまう。

「魔王陛下にも注意はされているかと思いますが、后様は一部の魔族からお命を狙われております。くれぐれも、お一人で出歩いたりなさいませんように」

ぼかんとしているアウインに、諭すように言われた。

あ、やっぱり私が狙われてたんだよね? はい、身にしてみてもわかりました。

「魔王陛下の部屋より外では、今のところ后様に安全の保証はできませんので」

しゅんとうな垂れた私に、畳み掛けるような忠告。

そして……

「な……」

また、キスされた。

「ここも、部屋の外、ですので、気を許してはいけませんよ」

そう言って笑うアウインは、魔性の微笑を称えていた。

私の安息の地は、どこですか???

第29話 紅の瞳（後書き）

お気に入り登録10000人突破！！ ありがとうございます！！
皆様の期待にこたえられるように頑張ります！！

第30話 護ってくれるもの(前書き)

久々の更新です!!

お待たせしました!!

第30話 護ってくれるもの

パタン、という扉の閉じる音で我に返った。

ぼんやりしつつも辺りを見渡せば、見覚えのある景色。

うつすら黒い魔力が満ちた、魔王様の部屋だ。

けれど、あれからどうやって部屋に戻ったのかさっぱり思い出せない。

気付けば見覚えのあるベッドにぼんやりと座ってた。

側にヒトの気配はない。

記憶を何とか呼び起こしてみれば、つい先ほど、この部屋まで送ってくれたアウインが退出していったのだと思い当たる。相変わらず、あれからどうやってここま帰ってきたかは全く記憶にないのだけれど。

ちょっとイロイロありすぎて混乱してるみたいだ。

なんていうか、何にも考えずに眠りたい…。

ぼんやりしたまま、ベッドに体を預ける。

柔らかなベッドに吸い込まれるように、眠気が降りてきた。

なんだかどうとも疲れた。部屋の外があんなに危険だったなんて、思いもしなかった。

もうこのまま、寝てしまおう。外は怖いけど、ここなら大丈夫。

……大丈夫?? 本当に??

ココは、ホントに、安全な場所??

……イヤイヤ!!

急速に眠りの世界へと向かっていた意識が一気に覚醒する。

「ここが安全な場所？？」 答えはもちろんNOですよ！

危うくこんな危険な場所で不用意に寝るとこだったよ！

ガバリと起き上がり、辺りを伺う。窓の外は明るい。あれからそんなに時間はたつてないみたいだ。

こんな悪の本拠地で無防備に寝ようとするなんて、私はなんてウカツなんだろう！

部屋いっぱい広がる魔王の魔力。

この部屋の外は色んな色の魔力であふれていた。でも、ここには魔王の魔力しか見えない。魔王の魔力で護られているみたいだ。

そのことに、ちよつと安心しちゃった自分がくやしい。あんなむつとり鬼畜魔王にいいように乗せられている気がする。なんてこつたい。

そういえば、ソラはどうしたんだろう？ 回廊に締め出されて

たっぽいけど…

あの中庭にいた2人の精霊さんも、せつかく手を振ってくれてたのになあ。また、会えるだろうか？

『会えるよ！』

突然の声とともに現れたのは、さっきまでアウインに締め出されていた役立たずな精霊、ソラだ。

「ソラ、大丈夫なの？」

きいてみて、しまった、と思った。ソラの表情が目に見えて曇ったから。

『ホント、むかつくよね！！ 精霊の人権なんだと思ってるんだろ

!!

「これだから魔族って嫌いなんだよ!!」

泣く…かと思ったソラは、いつかのように自分を追い出した人物に対する怒りをぶつけてきた。

なんていうか、ソラらしくて安心する。

「会えるって、どういうこと？」

このままソラの愚痴を聞いたところで埒があかないと本能的に察知して、話題を戻す。

何より気になってたことだし。

「また、あそこに行けば会えるって事？　けど、魔王はもう簡単には外に出してくれないと思うんだけど」

正直、私自身もあまり外に行きたくない。

自分を護るだけの力がない今のままでは、また怖い目に合うのが目に見えてるから。

『うっん。もうあの2人はホタルの事好きになってたから、きつと向こうから会いに来てくれるよ』

「向こうから？　それは嬉しいけど、私の事好きって？　まだ話もしたことないのに」

『精霊は、見ただけでその人の事好きかどうかわかるの。それにあの時2人とも、ホタルの事護ろうとしてたし』

そういえばあの時、「ホタル！」って叫ぶ精霊さんの声を聞いた気がする。

護ろうとしてくれてたんだ。なんか、うれしい。

「ソラも、ありがとう」
『え？』

思い出したようにお礼を言うと、キョトンとした感じで返された。
でも、ちゃんとお礼、言いたかったんだ。

「私の事、護ろうとしてくれて、ありがとう」
『そんな…私は何にも、出来なかったのに…』
「それでも。私のこと心配してくれて、護ろうとしてくれて嬉しかったから。ありがとう」

危険がいつぱいで、命が狙われてて、でも、それでも私を護ろうとしてくれる存在。

それって、とても力強い。
そんな精霊たちが付いていてくれるなら何とかなるかも、なんて、そんな風に思うんだ。

「なんだ、元気そうだな」
そんな声とともに突然現れたのは、この部屋の主。
そして、それとともに姿の消えたソラ。
扉の外に移った気配に、前途はまだまだ多難だな、なんて、人事のように考えてしまう私だった。

…はあ……。

第30話 護ってくれるもの（後書き）

遅くなりまして申し訳ありません。

体調もなんとか戻ってきたので、再開します！！

けどゆっくりペースの更新になると思います。スイマセン。

第31話 正当防衛ってことで

ホント、役立たずな精霊、ソラ。

なんて、ぜんぜん思っていない…といったら嘘になるけど、今回もあっさり追い出された可哀相なソラを恋しく思う。だって、また魔王様と2人きりだし。

確かにこの部屋の外は恐かった。

けど同じだけ、このヒトと2人きりであるこの部屋も危険だと思っ
うのです。

「また失礼なことを考えているだろう？」

どうやら思っていることが顔に出てたみたいです。

けど仕方ないと思う。だって、コクヨウってば眼鏡越しでもわかるくらい黒い魔力垂れ流しだし。

部屋に充満してる魔王の魔力が濃くなっていくのをなんとなく感じる。

外の、いろんな色の魔力で混沌とした空気を知ってしまったから、この純粋な黒い魔力が心地いい…。

なんて思う反面、その黒い空気を吸ってるかと思うと、中から魔王色に染められるみたいで気持ち悪い。

「だから、お前は思っていることが駄々漏れなんだ。少しは俺様を崇めろ」

「いや、それは無理」

なんでこんな変態魔王を崇めなくてはならないのか。無理無理。

そんな考えも顔に出ていたんだろう、私を見て、魔王がこれ見よがしなため息をつく。

ってか、ため息つきたいのはこっちだし。こんな世界に連れてこられて、この部屋から身動きの取れない私。なんてかわいそう。

なんて、自分を哀れんでいたら魔王がすぐ側に来ていた。

「な、なによ」

気がつけば顔を上げれば息がかかりそうな距離まで近づいていて、思わず後ずさる。

アウインとは違う種類のイケメン。フェロモン垂れ流しのその姿に、その気は全くないのにドキドキしてしまう自分が悔しい。だって、イケメンにそんな耐性ないんだもん、仕方ないじゃない！

アウインといえば、さっきキスされたんだった！！

ああ、なんでこんな状況で思い出しちゃうんだろう…。さっきのキスを思い出してきつと赤くなっているだろう顔を見られたくなくて、思い切り後ずさる。

けど、逃げた距離もあっさりと詰められて、目の前にはまた、魔王様がいた。

「な、なによ！！」

精一杯の虚勢にも、コクヨウの返事はない。

無言で距離を詰められるってかなり恐いんですけど！！

恐いとか思いつつも、今、私、顔が真っ赤なのではないだろうか?? イケメンの力っておそろしい！！ けどけど、それって、なんかものすごく、屈辱だ。

変態魔王相手に何を意識しちゃってるんだか。自分のことなのに自分でコントロールできないなんて悔しい。

距離を詰められたまま、静かに、メガネが外される。

私を見つめる二つの金色の瞳。その目を見て、昨夜の事がフラッシュバックした。

あの、蜜月の下での…キスが…。

このままでは、やばい！！

そう思って、掛けられた手を払いたいのにも、もっと距離をとりたいのに。コクヨウに触れられた部分が熱くて、見つめられる眼差しが強くて、視線を逸らすことも出来ない。

コクヨウは無言のまま。

コクヨウの顔が、というか、唇が私に近づく。

それが触れる直前、理性を総動員してコクヨウの体を突き飛ばした。

「離れて！！」

突き飛ばされたコクヨウは、一瞬啞然とした表情を見せた。でも次の瞬間には、楽しそうな瞳に変わる。

獲物を狙う、獣の目だ。

そう思った次の瞬間にはもう、唇を塞がれていた。

一瞬の出来事で、今度は突き飛ばせなかった。

塞がれ続ける唇を離そうと必死の抵抗を試みるものの、力の差がありすぎて全く歯が立たない。

逆に深くなる口付けに、意識が持っていられる。

…キス、上手いし…。

そんなことを頭の端で考えつつも、抵抗を続けた。

ってか、しつこいし！！

そしてねじ込まれるように入ってきた舌を感じた瞬間、私の中で何かが切れた。

「離れる！！ 鬼畜魔王が！！」

そんな罵声を浴びせつつ（まあ唇は塞がってたから心の中で言っただけだけでも）、舌を思い切り噛んでやった。

口の中に鉄の味が広がる。

魔王も血は鉄臭いんだね、なんて現実逃避気味に考えてみたり。

目の前の現実…それは、口の端と頬から（どうやら抵抗するうちに爪で引っかいたらしい）血を流した魔王様。そしてその体から発せられるどす黒い魔力。

正当防衛…で通じるかしら??

第31話 正当防衛ってことで（後書き）

魔王様暴走気味。

第32話 魔王様の本気(前書き)

久しぶりの更新でスイマセン。
魔王様視点でお届けします。

第32話 魔王様の本気

少しずつ、じわじわと落としていこうと、そうアウインに話したのは嘘ではない。

けれど、アウインを、他の男を思い出して頬を赤らめるホタルを見たとき、何かが動いた。

ついさつき、ホタルを城内の散策に連れていたアウインから、何者かに襲われたと報告があった。

それは想定内の出来事であったし、それも考えてアウインを付けていたので心配はしていなかった。

それに、この魔族の国というものの危険を理解させてやろうという思惑もあったことも否定しない。

これでおとなしく俺様の部屋にいてくれたらいいと、そう思っていた。

けれど、ホタルを部屋に送り届けたアウインからの報告に、急いで部屋に駆けつけたのは…

シヨックを受け、放心状態だというホタルを心配した？ いや、弱っているホタルというのも見てみたいと思った、そう、好奇心に過ぎない。

部屋に行った時、元気に精霊と話しているホタルを見てどこかホツとしたのもきつと、気のせいだ。

「だから、お前は思ってることが駄々漏れなんだ。少しは俺様を崇める」

「いや、それは無理」

そんな言い合いすら楽しく思う。

打てば響くように返ってくるホタルとのやり取りは、今までに感じたことのない楽しさがある。

今まで、この俺様に対してここまでぞんざいな態度をとるものはいなかったから。

ここまで、素のままの姿で接してくるものはいなかったから。

その思いのままに、ホタルとの距離を縮めた。近づいた俺に頬を赤らめるホタルも悪くないと思った。

…なのに。

ホタルは考えていることがすぐに顔に出る。

ここでの不安も、俺への失礼な考えも、そして、俺様じゃない別な男を思い出していることも。

「な、なによ」

俺が近づいた分、ホタルは俺から距離をとる。

それがまた面白くなくて、距離を詰めていった。

「な、なによ!」

無言で近づく俺様に、精一杯強がるホタルを見るのもなかなか楽しい。

強がりながらも、俺を男として意識しているのがわかるからなお、楽しい。

そんな心の内を隠しつつ、無表情のままにホタルの前に。
俺様とホタルを隔てる邪魔なメガネを外す。
怖がりながらも、しっかりと俺様の目を見るホタル。
俺の、金の目を…。
ホタルを怖がらせるだけのつもりだった。
けれど、俺の目を見るホタルの瞳が、昨夜の情事を思い出させた。
拒絶の態度も見せないホタルに、顔を寄せる。
蜜月の力でなく、俺様の意思で。

なのに!!

「離れて!!」

いきなり突き飛ばされた。

…けどまあ、これでこそホタルだ。
逃げる獲物を追い詰めてこそ、狩りの楽しみがあるというもの。
嫌でも俺に惚れさせてやるさ。

手始めに、先ほど拒絶された口づけを。
抵抗されようと気にしない。
むしろ、抵抗が気にならないくらい、ホタルとの口づけに夢中にな
っていた。
今までに感じたことのない魔力。何色にも染まっていない、陽の光
のような魔力をその内に感じる。
それをもっと深くまで感じたくて、探るように口づけを深くしてい
った。

正直言って、不覚だった。口づけに夢中になって、相手がホタルだということ忘れていた。

「離れる！！ 鬼畜魔王が！！」

そんな罵声を叫びながら（何度も言うが、ホタルの思考はダダ漏れだ。）、舌を噛まれた。

口の中に鉄の味が広がる。

自分の血の味を感じるなんて何十年ぶりのことだろう。

初対面の時といい、この俺様に傷をつけるなんて…。

体の底から湧き出る何かを感じる。

この瞬間、本気でこの女を落としてやろうと、そう思った。

自然、笑みがこぼれた。その笑みに、ホタルが後ずさる。

逃がしはしない。もちろん元の世界になんて還す気もない。

…覚悟しろよ。

第32話 魔王様の本気（後書き）

ホタルに本気になった魔王様（本人まだ惚れてる自覚はないですが）
この先、ホタルの運命は？？

第33話 背水の陣

部屋に立ち込めるとす黒い魔力。

マジ、恐いです。

なんとか逃げる方法を考えてみるものの、ここは魔王様の部屋で、部屋の外は危険がいっぱいで。

いやでも、この部屋の主である、黒い魔力の根源なヒトの方が危険か？

けどどつちにしろ、この部屋からは出れないだろうし…。

なんて考えてたら、さっき突き飛ばしたはずの魔王サマがまた目の前にいた。

やばいよやばいよ…。

なんかコクヨウ、目が本気っぽい…。

いつもなんだかんだ言いつつ、どこか私をからかってる感じで見たのに…。

口元から流れる血が更に恐さを倍増させている。

なんていうか、頭からバリバリ食われてしまいそう…。

「まあ、落ち着いて？ 話せばわかるよ、たぶん」

なんて言いつつ、説得一（？）を試してみるも、返事はなく。後退した分を縮められる。

広い部屋ながら、逃げる距離なんて限られている。

一步、また一步と後ずさっていた私の足が、何かに当たった。

もう壁？と見た先にあったものに、血の気が引いた。

ソレを確認し、顔色を変えた私を見て、コクヨウがまたにやりと笑う。

その笑みに、自分の未来を予想してゾワリと鳥肌がたった。

後ろにあったのはベッド。

昨晚もコクヨウと寝ていた天蓋付きの大きなベッド。

フカフカで寝心地も抜群なんだけど、今の、このシチュエーションはまずいですよ。

目の前のコクヨウの目が、笑みが、喰ってやると言わんばかりだもの！

いろんな意味で食べられちゃうよー！！

「ワタシ食べてもおいしくないデスよ？」

って、違うな。

えーっと、例えば、どうすれば逃げられる??

フル回転の頭とは対称に、動かない体を持て余しているうちに、コクヨウの手が伸びてきた。

息のかかるくらい近くにいた彼から、その手を避けるようとした。

自然、腰が引ける。

そして腰が引けた結果……

態勢を崩した私を、パフン、と優しく受け止めたのは件のベッドで

…。

見上げる形になったコクヨウの視線が、私と同じ視線に下がってきて…。

結果、ベッドに押し倒されてる感じに。

なんか自然な流れですけど、なんていうか、王手、な感じ？

「えーっと、あの、傷、つけてゴメンネ？」

覆いかぶさるコクヨウにとりあえずかわいく謝ってみた。
冷静な頭の片隅で、28にもなつて小首かしげてゴメンネはどうか
と思つたけれど。

「気にするな。こんな傷、すぐに治る」

私から目を逸らさないままそう言つたコクヨウの目はあの妖しい笑
みを浮かべたまま。

ペロリ、と口の端に垂れていた血を舐める。

そのしぐさから、その目から、視線を逸らせない。
逸らしたら、その瞬間に喰われる気がする。

なんなんでしょ、この色気！！

そんな免疫ないのに、あたりに満ちる魔王の魔力も相まつてか、一
気に雰囲気飲まれそうになる。

このまま流されてはいけない！！

「あ、あのあのー！！」

更に密着しようとするコクヨウの体を全力で押し返しながら、再度
説得を試みる。

「っていつか、私が拒絶しているうちは手は出さないって言ってな
かった??」

そう、確かそう言つてたはず。

よく思い出した、えらいぞ私！

「少しでも俺に心を許す気があるのならば、今すぐにも抱いてや

る、とも言ったはずだが？」

「いやいやいやいや、心許してないですから!!」

さっきからずっと何を見ているんだこの俺様魔王様は！
めっちゃめっちゃ抵抗してるじゃないか！

なんて心の突っ込みも、もちろん顔に出ていたらしい。
フツと、また馬鹿にしたように笑われた。

「本当に、少しも俺様に惹かれてないのか？」

「な…惹かれてなんか無いに決まってるじゃん!!」

なんて俺様な発言なんだ。

…けど、ほんの少しも惹かれてないのか、少し、ほんの少し、返答
に詰まってしまった。
そんな自分が悔しい。

「そうか？」

「そうですとも」

「まあいい。それは体に聞くまで…」

「え、ちょ、ちよっと…!!」

さっきまでの会話を無視して、再度体を寄せてくるコクヨウ。
駄目だ、こいつ、人の話聞いちゃいない。

このままでは本当に……

「すとーーーーっぷー!!」

ピンチに突然現れたのは白馬の王子でも勇者でもなく、かわいい女の子だった。

……えーっつと、どちら様？

第34話 救世主は役立たず

突然の侵入者に、時が止まった。

「とっつー!」

その際に、と、力の緩んでいたコクヨウの手を振り払い、逃げる。今までの人生でもまれに見るほどの素早い動きでベッドから飛び降り、できるだけ距離を取った。

危ない危ない。

もう少しでホントにやっちゃんところだったよ。

やっちゃんというか、やられるというか、まあ、あれだ。

それを、あの場ですぐに拒否できなかった自分がホントに嫌だ。

あいつの思い通りになっただけなものか!

私は意地でも元の世界に還るんだから!!

自分の意思を再確認した上で、状況を把握する。

部屋の隅っこにぺたりと張り付いた私と、対極の端にあるベッドの上にいるコクヨウ。

怒っているかと思いきや、その表情は若干の呆れ顔?

そして、さっきの声の正体は

可愛い女の子。

…ただし、半透明で宙に浮いてる。

つまりこれはアレですね。

「精霊さん?」

「ホタル、だいじょうぶ?」

あたしたちがきたからもう安心だよ！」

私の問いかけに対する返事ではなかったけれど、半透明のその子は、ソラと同じようなオーラをまとっている。空色のソラとは違って、この子は薄桃色。どこかで見たことがあると思ったら、先ほど中庭で見た精霊の片割れのような。

「助けに来てくれたの？」

「そう、ちょっと道にまよっちゃって、おそくなっちゃったけど。まにあった？ 魔王にくわれてない？」

「なんとか、無事、かな…？」

道に迷うとか、ソラみたいだ。

精霊ってみんなどっか抜けてるのかな…。

食われる、喰われる…キスはくわれたことになるのかな。

ま、無事は無事、かな。

…あんまり足腰に力が入らないんだけどさ…。

さっきの機敏な動きが嘘のように、若干プルプル震える自分の足を気遣いつつ、コクヨウを見る。

ベッドに腰掛けて、薄桃色の精霊さんを見ている。

さっきまでの呆れ顔からまた違った顔になってる。

その顔、どっかで見たことあるなあ。

そうそう、あれだ、ソラを見るときの顔。

なんていうか、邪魔なものを見てます的な？

つまり、この流れは…

「あ、ちよ、ホタ
」

…そして精霊さんは魔王によってドアの外に追いやられ、またもや魔王と二人きりになりましたとき。

とき、じゃないよ!!

役立たず〜!!

「やっとなついたあ〜」

と思つたら、またもや精霊さん登場。

今度は青色の精霊さん。

言わずもがな、中庭で会つたもう一人の精霊さんだ。

なんだかおつとりした精霊さんだなあ、と思つてたら。

「ホタル、大丈夫？」

頑張つただけで場所がわかんなくって……」

「…まだいたのか」

「…え??? あれ〜???」

私との会話も出来ないままに、コクヨウによって追い出されちゃったよ。

……精霊つてあれか? 役には立たないのか?

第34話 救世主は役立たず（後書き）

久しぶりの更新なのに短くてスイマセン・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0010m/>

白馬の魔王様

2011年11月16日22時17分発行